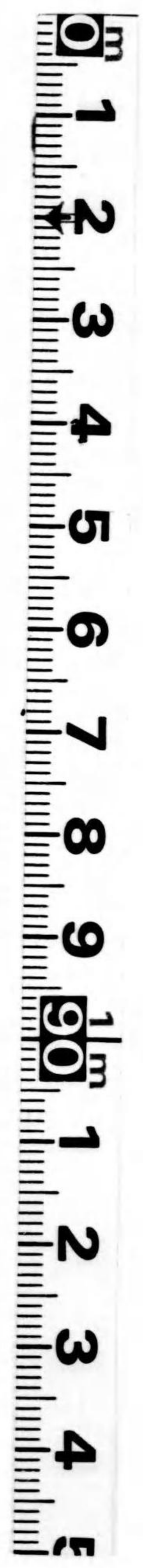


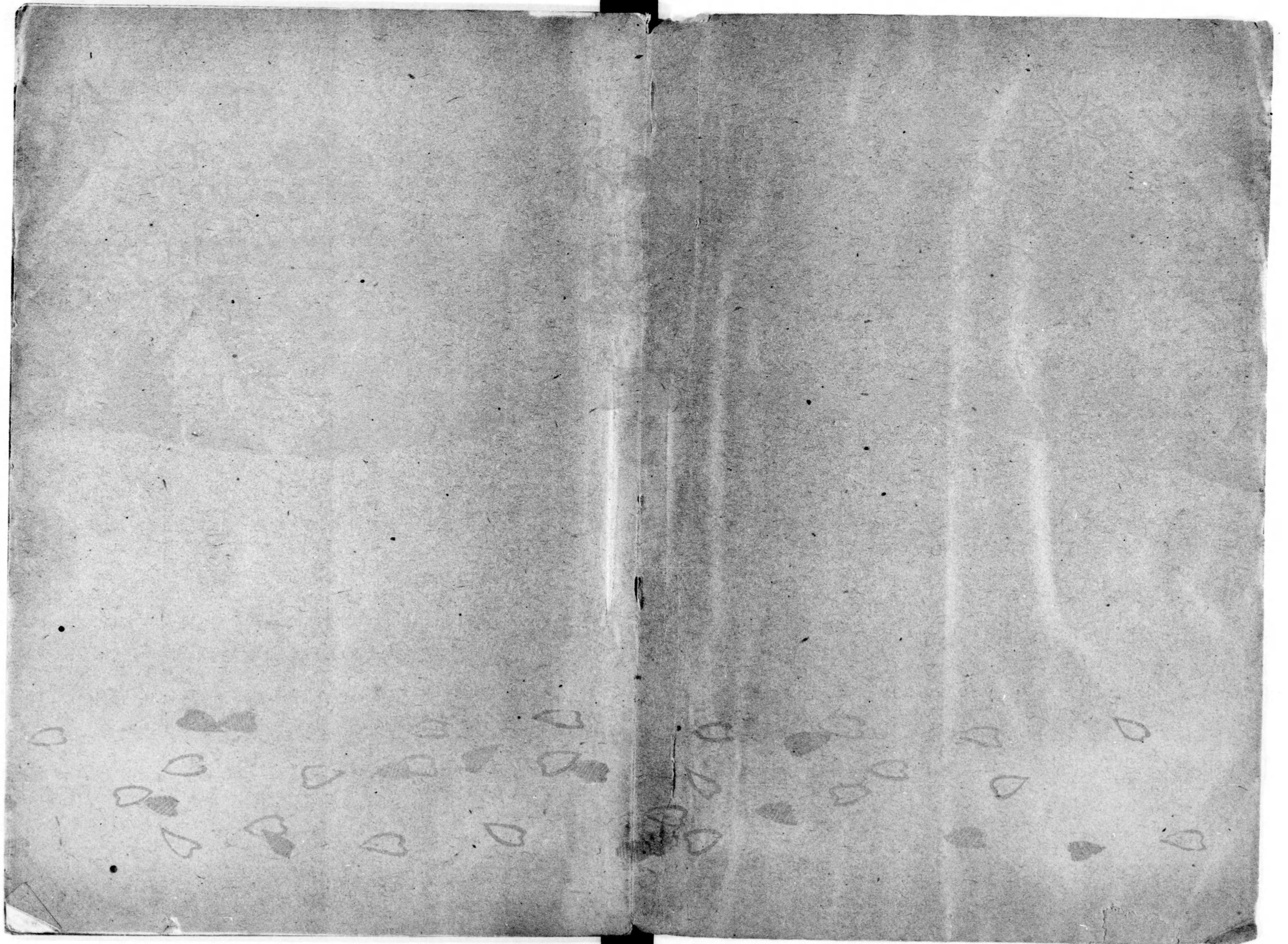
心こころ

井手蕉雨作  
太田雅光畫



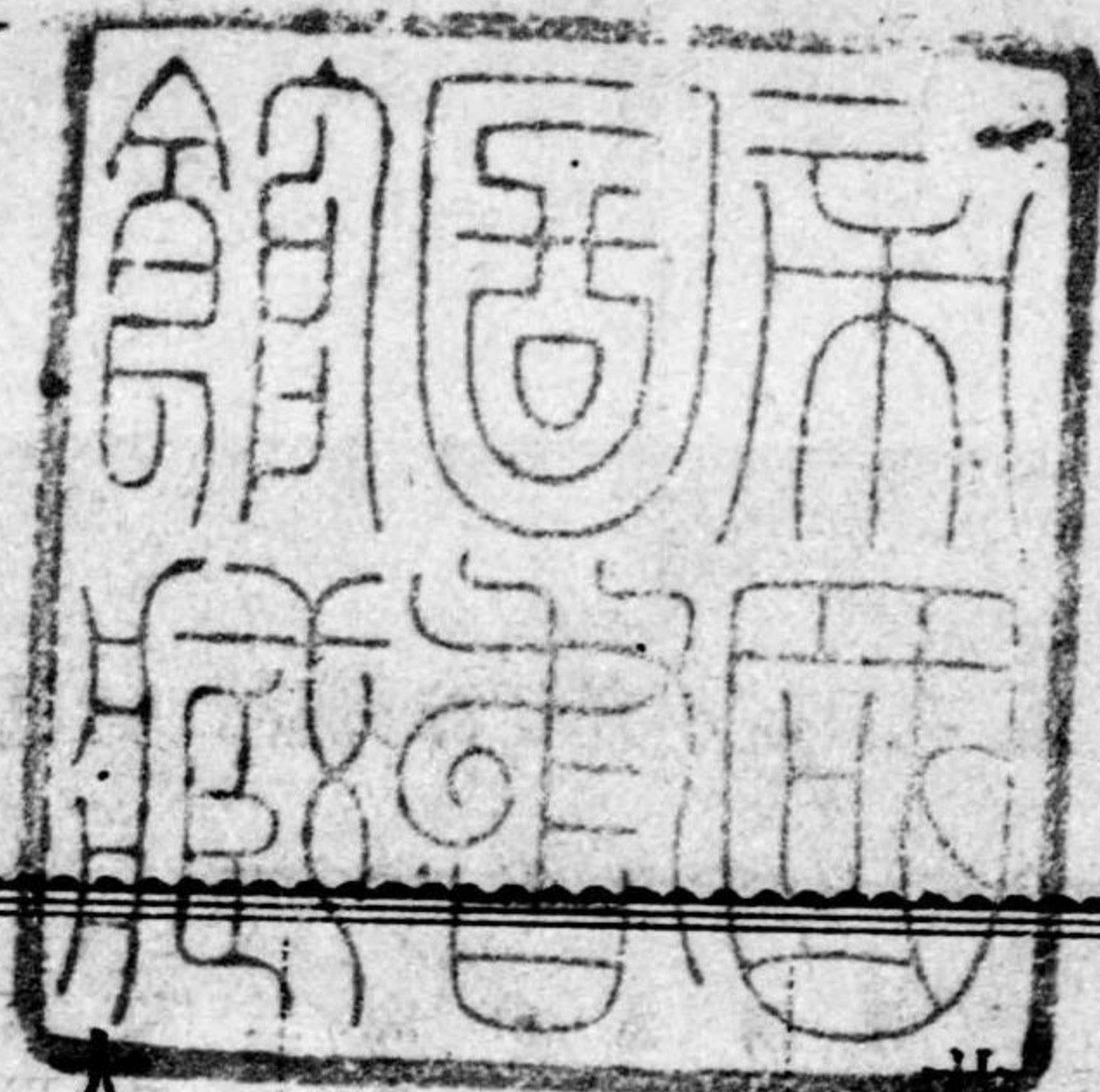
始





特103

105



太

井

田

心

手

雅

蕉

光

雨

畫

作





筆光

玉鳴館印行

■ 次目説小刊新館文隆口樋 ■

江見水隆先生作  
 須藤南翠先生作  
 武田仰天子先生作  
 和田天華先生作  
 三品聯圓先生作  
 鹿島櫻菴先生作  
 山田松翠先生作  
 島川七石先生作  
 橋本運木庵先生作  
 遠藤柳爾先生作  
 行次李鳳先生作  
 小林臥月先生作  
 渡邊歌禪先生作

空 中  
 新 深 寒 色 老 親 磯 櫻 飛 安 怒 鶴  
 船 船 船  
 の 船 船  
 變 紅 中  
 秘 づ 中 宅 子  
 花 妻 恨 梅 化 密 ろ 浪 貝 尉 丸 月 姫

聞新の地各國全は説小るせ版出りよ館文隆口樋  
 かすで物たれらへ迎て以を評好の大多てに上紙  
 すまいごう白面極至もてれと讀なれどら

小説 心

(断り無く興行を禁ず)

井手蕉雨

(一)

前宵の雪、今朝新たに霽れて、かゝやきわたる朝日の影に、軒も垣根もおしなべて、さながら萬顆のダイヤモンドを鑲めたやう。さらでも人の工を盡して、泉石の美を極めた氷室伯爵家の庭園は、今し自然の彩に、珠玉を敷き白金を展べて、壯麗目を駭かすばかりである。

ど、南受けの敷寄を疑らした圓窓をサラリと啓けて、先づ半面を見はしたのは、當主氷室光正伯に全身の愛を捧げてゐる美佐子夫人である。バツと射し入る明るい光線に、まばゆ氣に其の美しい眼を細めたが、不圖窓前の梅の老樹の、嵯峨たる枝

に積る雪間を、一輪、二輪、綻びそめた花を發見けて、

「マア、梅花が……」

と、更に障子を推啓けて、もの珍らしく看めるのであつた。

「エ、梅花が……梅の花が咲いたのですか、母ア様」

活々とした可愛らしい聲を先きに美佐子夫人の後背から、其細ツそりとした撫肩に手をかけて、のびあがるやうに梅花薫る軒端を見上げたのは、明けて八歳の春を迎へた、伯爵家の世嗣光人である。

クワ〜とした、二皮眼、林檎のやうに麗しい血色の、ハチ切れさうな豊かな頬繪に見るキュビットそのまゝの愛らしい盛り。

「然矣、梅花が咲きましたの！」

と、願勝つた美佐子は、いかにも可愛さに堪へ得ぬやうに、光人の紅い頬へ、わが眞白なる頬をおしあてるのであつた。

凡そ、人の世の美しさといふ美しさの中にも、美しい母の美しい子と相倚つて、

その慈しむ愛づる心と、親しみ懐かしむ心と、たゞ自から溶け合つて、他意なく打睦む状態ばかり、世に美しいものは又と莫い。今の母子は即てそれで、美佐子と光人どが相觸れた頬と頬とには微塵偽りも汚れもない、純潔な親しみと慈愛との温かい血潮が循環りつゝあるので、謂はゞ母子は取りも直さず、人の世の「美」の示現である。否す、直に「美」それ自身である。

唯見れば、梅樹の下枝に子雀が一羽、胸の和毛を顛はせてゐたのであつたが、時に羽搏音勇ましく飛んで来た親雀の、啄める餌に嘴を寄せた。母子の至情は微小さき飛禽にも見ゆる。心と心との交渉は如何なる強き力よりも強き力を有つてゐる人の子が温かき親の頬に、わが頬を凭せた時、誰れか其れを打ち撃たるべく危み惧る、者があらうぞ！寔に、晴れし朝の雪どゝも、清く深く、輝かしいのは、人の心と心との囀きである。

光人はやがて母の肩を離れて傍の手焙近く、半ば母の膝へ身を恁せて、稍斜にふり仰ぐやうに美しいその顔を見上げながら、

「母ア様、お父ウ様はもういくつ寝るとお歸りになるのです」

「お父ウ様ですか。左様ね。今日が九日ですから、一イニウ三イ……、オ、丁度光人さんのお年齢の數だけ、八つねんねをするとお歸りになりますわ」

「もう八つ。僕、待ち遠しいなア」

と、甘へたやうに肩を揺つて鼻を鳴らす、それが一層可愛いので、

「マア、そんなに被仰つても、お汽船が着かなければ、お歸りにはなりませんわ」

「さう？けれど、もつと早く歸つて下さればいいのになア」

「ホ、。光人さんは、そんなにお父ウ様のお歸りが待ち遠しいのですか」

「然矣、僕、早くお父ウ様にお目にかゝりたいの」

「そんでせうねエ。既う半歳ほども、お留守に遊ばしておいでなのですからねエ。それはもう光人さんばかりではなく、お父ウ様もさぞ早くお歸り遊ばして光人さんのお顔を御覽に成り度いと思召していらッしやるにちがひございません」

「ア、早くお目にかゝり度いなア」

「きつとお父ウ様は、澤山よいお土産をば下さることでせう。光人さんは能く大人敷くお留守居をなすつたのですもの」

「嬉しいな。く」

光人さんは、そんなにお父ウ様のお歸り遊ばすのが、嬉しいございますか」

「母ア様だつて、嬉しいでせう」

光人は無心に微笑むのであつたがまだうら若き其の母は情有りに、面を染て

「マア、いやな光人さん」と、いひさして、壁間に掲げた金縁の扁額を、儼むが如く瞥見るのであつた。

其處には眉目清秀の一個の紳士が、莞爾に此方を瞻めてゐる、それは芙佐子の所夫と仰ぐ、伯爵氷室光正の小照である。

嗚呼可懐しき良人!

去年の夏より米國へ赴いて、半年餘り、此度恙無く歸朝する。その日も漸く近づいて居る。久々で可懐しい所夫に逢はれると思ふと芙佐子は胸を躍らせずには居られなかつた。

芙佐子が伯爵夫人として、氷室家へ嫁いだのは十七の春で、十八の秋光人を擧げたのであるが、生れ得て貞淑温良な芙佐子は、常に自己の前身を反省て、苟にも驕り慢つた風はなく、たゞ慎ましやかに、身を遜つて、所夫を敬ひ愛し、兒を慈しみ召使の男女に情を掛けるので、はじめはその素姓を忌み爪弾きした同族の人々も、いつとはなしに、彼女の徳風に感じて漸く親しみ交はり、今では一箇淑徳高き伯爵夫人として、出で、は社交場裡の華と稱はれ、入つては令名ある賢夫人と仰がれ、滔々として虚榮に流る、貴婦人界の模範たるに至つたのである。

雪の明旦の暖かい日の影を浴びて、芙佐子と光人との母子は彼等の所天たり又父たる光正伯の歸朝の日を指折り算へて、樂しき團樂の夕を想ふのであつたが、誰か知らん、母子の前途には、暗い、暗い、運命の手が待つのであつた。

(三)

「エヘン」と咳拂ひが聞えて、さや／＼と袴の摺れる音がすると、

奥様、奥様」と訪れる者があつた。

「どなた?」と、芙佐子は聲する方を顧る。

「私でございます、駒田でございます」

「オ、駒田さんでした?、お入りなさい」

と、やをら、光人を膝より起して坐住を直すうち、隔ての襖を靜かに啓けて、恐



るく／＼にちり入つたのは、氷室家の家令駒田堅策男盛りの四十五六、漆のやうな鼻下の髭殿めしく、黒紋附の羽織に威儀を正して恭々しく禮を施した。

「さ、此方へお進みなさい」

美佐子は、嫣然に會釋する。

「は、デハ、御免蒙りまして」

と、堅策は稍進む。

●駒田 お前もお父ウ様のお歸りに成るのが嬉しいだらう！

突如横合から斯ういつたのは光人で、稚い人の習ひとして、只、單純な心から、自分の頭腦に充滿になつてゐる父の歸朝の怡びを、自然口走つたのであつた。

「は」

とばかり、堅策は、それに應ふる詞は、く、其座したのかさしうつむいたま、

忙しく、袂を探つて取り出した手巾で鼻と眼を押へたのである。

「ヤア、駒田が泣いてゐる。おかしいなア。おかしいなア」

光人はさも可笑しうに手を拍つた。

「マア、光人さん」

と、美佐子は覺せず制するのであつたが、と見れば、堅策は、いかに泣きでましたかのやう、眼を摺り赤めて、涕うち去んでゐるのである。

「ソラ、泣いたのです。眼が眞ッ紅になつてゐますよ」

光人は尙も手を拍つ。其の顔をつれづれと打目成つて、

「若様、あなたはお父ウ様のお歸り遊ばすのを、それほどまでにお喜びでございま

すか。ア、それに引かへて御前様には……」

堅策は再び手巾に面を掩ふと、その巾廣い肩を顛はして、聲を立てじと切齒るか、キリ／＼と齒を鳴らして男泣きに泣くのであつた。

「マア駒田さん、どう被成つたのです」

美佐子も尋常ならぬ堅策の有様に膝を進めずにはゐられなかつたのである。

「駒田、泣くとお父様にお土産をいたゞけないよ」

と、光人が頑是ない詞にも美佐子は微笑をすら泛べる餘裕がなかつた。  
萬一、所夫の身に、異變があつたのではあるまいか。と彼女は直覺的に然う感  
たので、

「もしや御前様に……」

と、口では出かゝつたが、其の刹那に、堅策が「否」といへば可いけれども、萬ヶ一  
にも「然」と答へたならどう爲やう、といふことに想ひ到ると、口は涸れ、舌は硬  
ばつて夫を問うべき氣力を失ふ。

が、此の場合、どうして問はれずにもゐられやう！

「駒田さん、しつかりして下さい。何んぞ變つた事でもあつたのですか。も、もし  
や御前様のお身に御異變でも……」

いひさして、半は無意識に光人の手を握りしめた美佐子の手は神經的に顫えてゐた

「さ、其の儀でございます」  
堅策は更に一膝進めた。

〔四〕

事有り氣なる堅策はの様子に美佐子夫人は坐るに胸を轟かしつゝ、  
「さ、どうぞ早く話し下さい。御前様に……御、御前様のお身に、御異變でもあ  
つたのですか早く、早く聴かして下さい」

心も急げば、聲も顫れる。

兩人がたゞならぬ氣色を見て、幼心にも心許なくおもはれたか、光人も唾を嚙む。

「夫人！、決してお驚き遊ばしては成りませんぞ」

「驚くな」といふのはむしろ「驚け」といふ反語で、美佐子は颯と顔の色を變へた。

「デハ、御病氣……。そ、それとも萬一……？」

聲は咽喉に塞がるやう。

「ま、まアお氣をお落着け遊ばしてお聴き下さい」

堅策は何を思ふか、復涙を拭ふのであつた。

堅策の語るどころによると、光正伯には早くより新橋の小艶といふ狎奴が、あつて、人知れず寵愛してゐたが、曩に渡米するに方つて、莫大な黄金を積んで落籍させ、わが出發に先立つてひそかに神戸へ立たせ、自分は單身横濱へ發し、神戸で同じ汽船に乗込ませ、睦まじく手を携へて米國に遊んだのであつたが、小艶は彼地に滞在中、光正伯の種を宿したのが、伯の寵愛は絶頂に達した。

寵を得て蜀を望む、人の慾には際限がない。はじめ小艶は伯爵の寵愛を享けて、楽しい旅行をするのさへ冥加ないと思つてゐたが、今伯爵の種を宿し一見ると、そこに何か掴み度い或物が出來て來た。

況してや伯は、さらでも其の色香に迷つて、遠く米國まで携へて行たほどであるから、其女がわが種を宿したと知つては、もう他愛はない。故郷に残した夫人の事も可愛い光人のことも、全く忘却して、了つた。

否、たゞにそれを忘はて、了つたばかりならばまだしも、このるが今や當面の愛

人たる小艶の爲に徳義も法律もうち忘れて世にも怖るべき考へ……鬼畜のやうな心を有つに至つたのである。

「夫人、夫人。お歎きは御尤もではございますが、左様にお泣き遊ばされずとも、まづお心をお鎮め遊ばしてお聞き下さいまし。まだ、怖ろしいお話があるのでございます」

堅策の聲はいと、沈んだ。

小艶の愛に溺れて良心の麻痺した光正伯は、いよいよ歸朝の期の近づくまゝに心急かされて、深く前後を分別するに違なくてか、世にも淺猿しい手段を講すべく、堅策に密書を寄せた。

それは、實に驚くべき沒常識な企てで、小艶を公然伯爵夫人に直すには、第一に邪魔になる美佐子夫人を押し付けて了へといふのであつた。

「夫人、私は實に驚いたのでございます。アレほど賢明な御前様が一婦人の爲にお心をお奪はれ遊ばして、貞淑な夫人に悪名をおつけ遊ばさうなど、は……」

「エッ悪名とは……？」と芙佐子は我知らず乗出すのであつた。  
 「ハイ、實は口にするさへ忌はしい儀で……夫人が不義をお働き遊ばしたと……」  
 「不義……不義ですツて？」

芙佐子は我が耳を疑はずにはゐられなかつた。

## 〔五〕

一毫の差は千里の差と古の賢人は道破した、僅か一婦人の爲めにいかに道を通して、アレはごまでに自分を熱愛してくれた所天の心が、斯程までに自分から離れて了つたかと思ふと、芙佐子は聲を揚げて泣かすにはゐられなかつた。

「御道理でございます」と堅策も眼を擦る。

「私、私、實に夢のやうに思はれます」

芙佐子は、此の爲体にオロ／＼してゐる光人を引寄せ抱めつつ涙に暮れるのであ

つたが、また思ひ返して見れば、アノ優しい、アノ親切な、情には脆いが理性の強い所天の所色としては、眞にあり得べからざることである。信じ易からぬこと々もである。

「駒田さん、それは事實のお話ですか」

「エ、お疑ひでございますか……御、御無理とは存じません。で、私も、どうか間違ひであればよい、否、私自身が、むしろ偽者であればよい、私の申上げること是一切お取げにならぬほど、私に御信用が無ければよい、と自分ながらも自身の御信用を呪はずにはをられんほどに思ふのでございます」と、聳えた肩から歎息を揺下したが、

「夫人。悲矣事實は事實でございます。あらう事があるまい事か、人もあらうに御舍弟様のアノ正司様と夫人とが不義を遊ばしたと申すことに……」

「エッ、正司さんと……」

芙佐子は唯ワナ／＼と身を顛はす。

「お母ア様、泣いては可忌よウ」

事理は解らぬが光人も、母の涙に催されて、貰ひ泣きをするのである。

「夫人、情願私の立場をお察し下さいまし、いかに心命を捧げた御前様の御命令とは申せ、飽迄も秘密を守つて、何事も御存じ遊ばさぬ夫人を窮地に陥れる如なことが出来ませうか！」

「駒田さん、私は何うしたらよいのでせう」

「お覺悟一つでございます」

「エ、覺悟ですツて……」

「イヤお考へ違ひを遊ばしませんやうに、お覺悟と申しましても決して死ぬの生きたと申すやうなさうした極端なお話ではございません」

「では、どう爲ればよいのでせう？」

「左様……暫らへ御身をお匿し遊ばすのが最も上策と存じます」

「エツ、私に身を匿せとお言ひなのですか」

「はい、其れが最も上策かと存じますのでございます」

「い、え。い、わ。そんな事は出来ません」

「出来ん？ホ、ー。何故でございますか」

「何故といつて、私、私の身には少しも後暗いことはありません。私の心には少しも疚しいことがないのです」

「そ、それは元よりのこととございます。が、併し夫人！」と堅策は、シリ、と進んで、

「貴女のお身に微塵後暗い事がなく、お心に疚しいところが有り遊ばされんければこそ、しばらくお身をおかくし遊ばせと申す、でございます」

と、ジツと芙佐子の瞳を見た。

何に驚く、小雀がバツと立つと梅枝の六花がハラ〜と散つた。

〔六〕

身に後暗いこともなく、心に疚しい點もなく、此場合身を匿すのは果して策の得たるものであらうか？

美佐子は疑乎と思案に沈む。

「夫人。此際御思案は御無用に遊ばせ。何を申すも御前様には、御本心を喪失はれておいで々でございますで、唯今のところいかほど道理を盡して御諫言申し上げたてお耳には入りますまい。夫人のお身にもお心にも一點の過誤のございませぬことは私、よく承知をいたしてをります。疚しい點がお有り遊ばされん—申さば濡衣をお被になりましたので……、それも他人の讒言の爲めと申すではなく御前様御自身にお企みに成りました事でございませぬから、申解くべく術としては絶對にないのでございます……」

「……………」

美佐子はたゞ手巾を噛めて身を顫はす。

「私、駒田と致しまして、面り御諫言を申し上げましては、却て猛火に油を注ぐやうなもので……此場合、むしろお逆らひ申上げず、他に活路を求むるのが最も安全で且賢い致方であらうと存じますので、斯様にお勧め申上げますのでございませぬ。情願枉げて右様に遊ばされまして、一時所謂鋭鋒をお避け遊ばされた方が御得策と信じます。不肖乍ら駒田堅策、一身に代へまして決してお悪いやうには仕りません。夫人並に若様のお身に恙無く、日ならず圓滿に解決を告げまするやう、必ず時許ふ考へてございます。

聲涙共に下るとでも謂ふべき堅策の熱烈な詞は、美佐子の心を動かさずには措くまじき氣色であつた。

愆くても美佐子は脚蹶はぬを得ない。

「デモ、私、たとへ何のやうに御前様のお憎しみをお受け申さうとも、私は、わ、

私は、此の水室家を一步たりとも去らうとは想ひ切れませんもの……』とばかり  
さめくと泣くのである。

『か、斯程迄に御貞節な夫人に宛の悪名をお付け遊ばさうとは、御、御前様のお心  
も、餘りと申せば餘りに残酷に過ぎます』と堅策は切齒をしたが、

『とは申せ、此まゝには居られませんか。御前様のお歸邸には最早間もございませ  
で、お心には濟みますまいが、是非に一時お立退きを願はしう存じます』

『けれども、私どうも……』

『イヤ』と堅策は力強く云ひ消して、『左様なことを被仰いまして、飽迄お心の

紊れた御前様の事でございまして、あなた様は兎もあれ、萬々一、若様のお身に  
御異變があるやうな事でもございましたれば如何遊ばします！夫人、若様はお可  
愛うはないのでございませすかッ』

『若様』の一語は霹靂の如く美佐子の鼓膜を撃つてビク／＼と肉も動き、覺えず膝  
の我兒を見ると光人はいつの間にか泣き寝入りに眠ッてゐる。嗚呼罪のない其の寢

顔！

美佐子は胸が張裂けるやうに感て、無言に其れを指差して堅策と顔を見合せた  
『お可憐らしう存じます』と堅策も面を掩ふ。

『ア、正司さんでもおいで、あつたら……』と美佐子は堪へ得ず身を悶へる。

『實際、生憎の事で、正司様は斯様の事があらうとは御存知なく、今朝未明にいづ  
れの方面へともお申しおきなく御銃獵にお出ましに相成りましたので、お歸りの  
程も判然致しませすその後へ御前様のお手紙、御相談申上げる方もなく實に途方  
に暮れたのでございませす。併し、場合が場合でございませす、ナマジ正司様にお會  
ひ遊ばさん方が却てお宜しうございませす、お歸り次第、委細私から申上げ善後策  
を講じますで、其邊には御懸念なく一日も早くお立退きのお準備を遊ばすのが御  
肝要でございませす。就きましては、誠にお目に懸けるに忍びんのではございませ  
が一應御前の御書面を御覽遊ばして斷乎たる御決心を願ひ度う存じます』と懐中  
を探つて一封の書簡を取出した。

「サア、殺せ、殺しやアがれツ。うぬ等アよくも寄つて鷹つて袋叩きにしやアがつたな。もう斯うなつちやア逃げも匿れもしやアしねエ、殺すともごうとも勝手にしやアがれツ」

大地へ挫乎と胡坐をかいて、蒼白い苦味の走つた顔へ滲む血に凄味を見せつゝ、悪びれもせぬ面魂。

「此の野郎、まだあんな事をいやアがる、いけツぶてエ野郎だ。もツと擲れ〜ツ」  
と、旅館の手代らしい男が、さも憎さうにいふ聲の下から周圍を取りまいて居た五六人の若い者がガヤガヤと口々に罵〜ツテ笞の雨が又一と頻り。

「うゝむ。殺せ、殺せツ」と、打たれながらも苦痛を堪へて猶身をすりつける。

「待て〜」と以前の手代が若者を制して「ヤイ盗人貴様のやうな死太い奴は見た

ことがねエぞ。だが盗人でも殺せば後が厄介だ。擲くだけ擲いたら警察へ引渡すからさう思へツ」

「なんだ警察へ引渡す、面白れエさア引渡せツ。さア突出せツ」

「おう、突き出してやるから一つしよに來せろツ」と、首筋へ手をかけて引立てかける。

「オイ〜、ま、待つてくれ」と、横合から怖々ながら顔を出したのはのツベりした青年紳士で「じ、實はナ、今日はその、ホンノ微行で、警察など、表向にされては困るから……」と目顔で示らす。

「へい、な、なるほどへ、。」と手代は何か會得顔で「オイ〜一同、憎い野郎だが品物も取り返したし、旦那様もア、被仰ることだから、今日のところは見逃してやると爲やうか」

「チョツ、運のい、野郎だなア」と若い者等は忌しさうに舌打ちをする。

「まアよろしいオイ、コラ賊ツ貴様、もうい、から早く行け」と紳士は願で指圖を



する。件の男は凄いで目で見上げて、

「へエ、それぢやア行つてもいい目んですかい」

「ウム、許すから行け」

「喧しいやいッ、何んだ、許す？なによウ聞いた風なことを吐しやアがるんだ。うぬの都合で警察へ突出せぬエのを、恩に被せて「許す」たア何んだ。さア斯うなつちや此方も意地だ、否でも應でも突出してくれ、くッ」

「さう吐せば……」と、若い者は又立ちかゝる。

「ま、待て、皆待て、そ、それでは私が甚だ困ると」紳士はいよいよ狼狽の體である。

「チョッ、忌々しい野郎だなア」と若い者等は齒搔さうに腕を擦る。

「フ、ンぢやア何うしても突出すことア出来ぬエといふんだな。さうだらうよ。物好らしく此様偏鄙へ妙なめいたを携れて来るからにやア、身分柄警察沙汰にもされぬエよ」と、紳士の背後にブルブルして居るそれ者らしい女に尻目をくれて、

冷笑つたが「ぢやア何んだな、俺ア盗人ぢやねエといふんだな」

「そ、そ、さうだ。貴、貴様は賊ではないから、は、早く行け、行け」と紳士は内兜を見透かされて受太刀である。

「解つた。其方でさう出れア、此方も器用に歸つてやらう……といひてエが、まあ嫌だ。盗人でもねエ者を、寄つてたかつて擲りやアがッて……ア、痛てエ、痛タタ、痛くッてく、死にさうだ。斯う痛んぢやア歩かれぬエ。ヤイ二本棒ツこの始末ア何うするんだッ」と、ふてくしい。

「あなたや、いくらか遣つて早く歸して下さいよウ」と女は紳士の袖を引く。紳士も弱味につけこまれたのが災難と断念めて、いくらかの紙幣を女に渡す。女は手早く紙に包んで。

「アノ、ど、泥棒さん」と傍へ寄る。

「何にッ」と、賊は吃ど、顧眄る。女は吃驚飛退いたが、

「そ、それをお前さんに進げるから、後生だから早く云つて下さい」と、投げるや

うにして金包を渡す。

『さうか、氣の毒だなア』と、包みを開けて瞥たが、忽ちハタと足下へ叩きつけてえいッ馬鹿にするなッ一兩や二兩の端タ金で、此大怪我の療治が出来ると思ふかッ面倒臭エから突出してくれッ』と、程積でも動くまじき権脈である。

〔八〕

程近い驛に汽車が着いて、一群の旅客が吐出されるやうに停車場からむら〜と出た。

中に一際群を抜いて、長身白哲希臘の神話にある、アポロの神が抜出したのかと思はる、許の美丈夫があつた。輕快なる狩獵服に、毛皮裝のハンチング、斜に銃を肩に懸けて、濶歩に搖ぎ出た。

幾多の旅客は思ひ〜に心指す方へ散つた。

件人の美丈夫は伴の男を麾いて何事か吩咐けるやうであつたが、自身は其ま、町の方へ二、三丁、唯有る旅館の門を入らうとした時。

『サア突出せッ、突出さねエカツ』と甲走つた聲、つゞいてワヤワヤと多勢の罵しる聲と、もに、打つか蹴るか烈しい物音がして、

『殺せッ、殺せッ』

と叫ぶのが、門内から聞こえたので、美丈夫は覺せず歩を止めたが、躊躇するどころなくツカ〜と門内へ進み入つた。

見ると、玄關の横手の植込の傍で、五六名の若い者等が一人の男を取巻いてゐる。その後方には、駙馬男爵と綽號のある飯田男爵が神樂坂邊の狎奴と、窮つたやうな顔をして立つてゐる。其の狀態いかにも事有りげではあるが、唯一人の者を多勢で打擲するとは穩かでない。事理は兎に角、此ま、に見過し難い。が、唐突に横合から口も出せぬので、しばらく植込みの蔭から様子を見る。

『殺せ、殺せ、殺さねエカツ』と、物狂はしい聲が又聞えた。顔は取巻いた若い者

等の蔭になつて見えないが、其の聲音には聞覚えがあつた。

「はて？」と、首を傾げた時、ビシリと強く打つ音をして、

「擲けくツ」と口々に罵しりつゝ、壘の埃でも叩くやうに笞が下つた。もう傍観ては居られない。

「待てツ」と一喝して、脱兎の如く躍り出た美丈夫は、今や柄物を揮下さんとした若い者を突退けて、矢庭に身を以て賊を掩ひ大手をひろげて、

「待てツ待てといふたら待たんかツ」と膽に應へるやうな力強い聲で制めた。

呆氣にとられてゐた所謂騎馬男爵は、美丈夫の顔を見るとひとしく、俄に慌て、マゴ／＼する女の手を引き立て、狐鼠々々と匿れて了つた。

不意を打たれて驚いた手代らしい男は不圖制めた人の顔を見て、急に腰を屈めてペコ／＼と叩頭をしながら。

「こ、これは東京の旦那様でございましたか、少しも心づきませんで、と、とんだ失禮をいたしました」と頻に詫入つたが、若い者等を顧みて、『コレ、鉢巻を取ら

んかい。失禮千萬な』と叱り飛ばすのであつた。

「そんな事はどうでもいいが、大勢寄つて唯一人を手籠めにするとは大人氣ないではないか。一體これは甚麼したのか」と、美丈夫は詰るやうに問ふ。

「イエ、もう旦那様のお目ざわりに相成りまして、何んども恐れ入りましてございます。實は、其の野郎……イエ、ナニ、そ、その男が、此處においでのお客様の……」と四邊を見たが、當の紳士が見ぬので怪訝な顔をして『オヤ何處へおいでになつたか知ら』とキョト／＼する。美丈夫は苦笑ひして、

「で、其客をどうしたといふのか」

「ハイ、そのお客様の携帯品を掻落はうといたしましたのを、手前が発見けましたので、ツマリ、その、ど、泥棒なのでございます」

「ナニ、賊？」

と、此時はじめて顧みた美丈夫は念なくも彼の賊と所見合せたが、  
「ヤツ、貴様は……」と、思はず驚きの聲を揚げた。

打たれても叩かれても、昂然として萎む色なく、金輪際から生えたやう、動く氣色も見えなかつた彼の賊も、一と度美丈夫の面を見るや、忽ち颯と顔色を變へて、『お、若様ッ』と、腰を浮かしたが、『面目無エ』と心の底から唯一語、そのまゝ、其處に崩折れて、消えも入り度き状態である。

『デハ、旦那様の御存知の……？』と手代はふしぎさうに双方を見比べるのであつた。

『イヤ、仔細あつて此男は見識つて居る。そして盗んだ物は何うしたか』と、美丈夫は手代を顧みた。

『へイ、盗んだ物は、皆取返して了ひましたが、そのお客様がお連込みなんで、へ、へ、へ、。どうもその、表沙汰にするのをお困りの御様子でございますから、そ

の足許につけこみアがつて、理が非でも警察へ突出せと啗みかゝりアがる……ナニ、そのいがみかゝるものでございますので、ツイ手荒なこともいたしましたやうな譯合で……』と、頭を掻く。

『さうか、よく解つた。デハ、僕が意見をなへて素直に退散るやうにしてやるからお前達はモウ此方へ行くがい、』

『左様でございますか。イエモウ、さう願はれますと何よりでございます。ナニあなた、手前共でも、強て繩付きはだし度くないのでございます。それでは、何分よろしくお願ひ申上げますで……』

『よし、承知した。さ、彼方へ行くがい、』

『それは兎に角、旦那様、今日はお單身でゐらつしやいますか。又例の御獵と見へますなへ、へ、へ、』

『昨夜の雪は喉かされて、又斯うして出掛けて来たよ。今度は山の中で二三日テント生活をやるつもりだハ、ハ、ハ、。後から伴の者が二人ばかり獵犬と荷物を驛で

受取つてやつて来るから宜しく頼むぞ』

「へい、承知仕りましてございます。デハ、一寸失禮いたします』と手代は若い者を引つれて其場を去つた。美丈夫は其後を見送つて、

「芳造此方へ来い』と、先に立つて、玄關の横手の枝折戸を押開けて、勝手知つたる庭傳ひに、人なき築山の四阿の方へ歩みを運ぶ。芳造と呼ばれた賊は、唯々として立上つたが屠所の羊の惰々として跡に跟く。

一と叢竹の雪に壓されて、軒を蔽ふた四阿の、椅子に代へた自然石に先づ腰を掛けた美丈夫は、

「まア貴様も掛ける』

「へい』とばかり、賊は地上にうづくまつて、面無げにうなだれる。その様子を喟然として打眺め、

「芳造!』

「へい』

「貴様、一體何うしたといふのかツ』肺肝を穿つ様な深刻な聲!

旅客の遊みか細く長く哀れをひく尺八の音が聞えて来た。

「面目次第もございません』

「ナエ、面目ない? 貴様でも面目ないといふ事を知つてをるか』

「芳造、貴様が放蕩に身を持ち崩したことは、乃公が兵隊から歸つた時、貴様の親父の佐兵衛から聞いた。が、賊を働くとまで墮落しやうとは思はなかつた。芳造ツ貴様は何といふ情なら奴だ』

「元來貴様の自暴自棄になつたといふ、その原因は何にかツ』

「男子たるべきものが、僅に一婦人の愛を失つたからといふて、自暴自棄に陥るとは何んたる事かツ』

「……………」  
 「佐兵衛の話では、貴様が戀した其の女が、藝妓になつて、何者にか落籍をされて了つた爲めに、戀から酒、酒から色、色から賭博と身を持ち崩したといふことであつた。が、今日の今まで賊にまでも成果てたとは知らなかつた」

「……………」  
 「芳造ッ、貴、貴様には、貴様の墮落に泣く、斯の正司の心は知れまいッ」  
 正司の聲は慘として涙を帯びた。尺八の音は斷えつ續きつ……………」

〔一〇〕

正司と芳造との二人は、やゝ少焉、無量の感慨に打たる、態で、黙々として相對した。旅客の遊みの尺八の音が、顛へるやうに淡い哀愁を誘ふて流れる。やゝあつて芳造は、深い、深い歎息を吻と吐いて、

「悪い事をいたしました」

と、改悟の色が面に動いた。

「ム、貴様、氣が着いたか」と正司の顔にも希望が輝いたが「悪いと知つたら潔よく自首を爲エ」聲はさすがに曇つてゐた。

「エッ自首？」と、芳造は思はず正司の顔を見た。

「然うだ！男らしく自首をして相當の處刑を受け、生れ變つて歸つて來い、貴様が全く改心して、青天白日の身と成つたら、正業について身を立てる、その時には乃公が屹度面倒を見てやる。さ、氣がついたら其足で直ぐに自首爲エ、過ちを改めるに躊躇するなッ」と、正司の詞は凜として秋霜烈日も管ならぬ。

「ヘイ、有難いことに存じます。生れ變つて歸つて來たら、面倒を見て下さらうと御深切なお詞……………モ、勿體なうございます」と芳造は聲を濕ませる。

「ム、では、貴様自首するか」と正司は其の心を讀まんとするが如く凝乎と芳造の面を瞻た。

「ヘイ、そりやアもう、自首しろと被仰れば、自首をするに否やはございません。が……、實は今日辛耐婆へ出ましたばかりで……お恥かしいことではございませんが酒と女に心を奪はれ、天にも地にも掛替エのねエ、たつた一人の親父も振捨て、爲度エ三昧悪い事をした酬ひで、三年といふもの暗い冷たい牢の裏へ叩ッ込まれ、やつと年貢納めて太陽の顔を見たのも僅一日、これまでの悪事は三年の處刑で帳消しになりましたが我が身に慚ぢて親父のところへも寄りつけず、寄る邊無しの身過ぎに窮つて、悪いと知りつ、只今のやうな心得ちがエをいたしましたア、もう少し早く若様にお目懸つたら、あんな不了簡を起すめエに……とんだ事をして丁ひました」と、落す涙に心肝は見えた。

「では、一旦處刑を受けて、やうや青く天白日の身と成つたばかりで、又悪事を働いたのか。嗚呼糞土の墻はなだらかにすべからず、貴様は骨まで墮落したなツ。コレ芳造、貴様は乃公と同年で、幼少い時から友達だ」

「勿、勿體ねエことを被仰います。親父が永年お邸の御門番を勤めさせていたッかしてをりますので、子供の時分からお遊び相手をいたしては居りましたが、と、と友達のなんの、も、勿體ねエことでございます」

「奉公人の子ではあるが、亡なられたお母様が、大層貴様を御最負で、乃公の遊び相手にさせて下さつたが、其後乃公は志願兵で入隊し、引つゝいて出征したので久しく會ふ機会もなく、貴様は徴兵検査に不合格であつたと聞いたが不身持が嵩じて悪事を働き、親の家を飛出したといふ話で、乃公はどの位貴様の身の上を案じて居つたか知れはせんぞ」

「……………」

「身分が違ふと謂は、謂へ、乃公と貴様は竹馬の友だ。その友の墮落を聞いて、乃公はどれ程悲しんだと思ふ！」と、一語は一語より切に、力強く、而も情は濃に響く。

大磐石に壓されるやう、知らず識らずうなじを垂れた芳造は、此時、覺えず大聲を揚げて、男泣きにワツと泣いた。

「芳造、何故泣く？」

「わ、私が悪うございました」と、芳造は土に喰着いて身を顛はすのであつた。

「ム、では、向後ふツつりと悪事は止めるか」

「そのお優しいお詞を承はりましては、いかな根性の腐つた私でも改心せずには居られません」と、獻歌上げる芳造の、みすばらしい姿をつれづれと見た正司の眼にも暗涙があつた。

「然うか、ヤ、よく改心してくれた」

「口先ばかりでは御安心がなりますまい、私はこれから直ぐに名乗つて出ます。若様！、ご、ごらぞ御機嫌よろしく……」

悄悄と立上つて行きかける芳造を、正司は遽に呼止めた。軒端の竹が雪に折れて、深い音。

〔一〕

真情溢る、正司の意見に、はじめて本然の性に歸り、潔よく自首と心を決して、立上つた芳造の、呼止められつ小戻りして、

「何んぞ御用でございますか」と、見上げた顔には涙に冷たく濡れてゐた。

「芳造。貴様の心は、變るまいな」と、正司は念を押す。

「へい、大丈夫でございます。二度と再び了簡違エはいたしませんでございます」と、芳造はきつぱり答へた。

「然うか。その詞に偽りがなくば自首には及ばん」

「エツ、そんなら名乗つて出ませんでも……」

「ム、賊を働いたとはいへ、盗んだ物は元へ戻り、殊に改心したとあれば、最早其筋に手数をかけるにも及ぶまい。自首した氣で正業に就いて、いかなる苦勞も堪



へ忍び、屹度立派な人間になれ」

「有難う存じます。石の上にも三年とやら、死んだ氣に成つて眞面目に働くでございませう」

「よく言つてくれた。飽迄も其の心を失ふなよツ。苟くも人間と生まれたからには人間として死なねばならん。人間として死ぬるには、人間たるべき行ひが要る。

人間として、信義がなくなれば、人間たる眞價が何處にあらう？ 芳造ツ。必ず人間に成らねばならんぞツ」正司の詞には千斤の重みがあつた。

「若様ツ。お詞は骨身に刻み、心の底へ彫りつけて、きつと眞人間に成つてお目にかけます。御安心なすつて下さいまし」芳造の面には信實が現はれた。

「然うか、それで斯の正司も意見の云ひ甲斐があつて悦ばしい。就いては芳造、正業に就けと口で言ふたばかりでは、佛作つて魂入れずだ。正業につくにも相當の資本が要らう。相僧出先で用意は無いが、ここに僅ばかり持合せがある、兎に角これを持つて行け」と、衣匣を探つて一束の紙幣を掴み出し、無造作に手巾へク

ルくと巻いて芳造の膝の邊へさし寄せた。

「ど、ど、どういたしまして」と、芳造は驚いて、身を避けつ、「ど、とんでもねエことを被仰います。千金にも換へ難ない御意見を戴きまして、迷ひの夢の覺め

たゞけでも、厚い御恩でございます。其れを貴君、此の上お金なんぞ頂戴しては芳造に罰が中ります。いたゞきましたも同然でございますから、此金丈は情願お

納めなすつて下さいまし」と、恐る恐るおし戻す。

「要らん遠慮をするには及ばん。金が無くても何が出来る。一旦改心したところで、衣食住に窮すれば、再び不善を爲ぬとも限らん。イ、ヤ、これは貴様一人に就いて言ふのではない、世の中に幾多の罪惡の行はれるのは、敢て唯り罪人自身の罪

已而ではない、會々悔い改めた者があつても、それを扶け、それを導く者が無く折角の改心も容れられんので、心ならずも再び不善を敢てするに至るのだ。一半

の罪は社會にもあらう。貴様とても其通りだ。住むに家なく、着るに衣なく、喰ふに食なしといふ場合になつたら甚麽するか。又、世間から前科者よ、悪人よど

爪弾きされて相手にされなかつたら甚麽するか。其處が善惡の岐路だぞツ。善につくか、惡に走るかそれは貴様の心一つ、もう間違ひもあるまいが、危険は出来る限り避けねばならん。場合によつては却て危険性も帯んでは居るが時に取つて「金」は一種の安全瓣だハ、。遠慮は要らん、持つて行け」と、笑みつゝ、正司は件んの金を強て懷中へ入れて與つた。

## 〔一一一〕

正司が鐵をも熔かすべき熱烈なる強意見に、さしも墮落の淵に沈んだ芳造も、多年の迷夢一時に覺めた歎、眞偽は知らず涙を流して謝罪り入つたる状態は、今の今迄「突出せ」殺せ」と、おのが惡事を餘所にして傍若無人に罵り狂つた其人としも思はれず、みすばらしきまで潮垂れて、面も得上げず只泣きに泣く。

「さ、その金を持つて行くが可い、一ツばしの人間に成つたらば必ず邸へ尋ねて來

いよ。其れまでの間は、親の佐兵衛は屹度乃公が引受けた！嬰鏢なやうでも佐兵衛もモウ六十の坂を越えて居る。貴様が一日も早く身を立て、歸るのを、乃公も佐兵衛と樂みにして待つて居らう。い、か、芳造、再び道を踏誤まるな」と、正司は嚙んで含めるやうに説諭すのであつた。

「何から何まで行届いた厚いお芳志、有難過ぎて、お禮の申上げやうもございません」と芳造は又新しく涙を落したが、「私事に拘泥けて、申おくれ居りましたが、御前様にも令夫人にもお變りはございせんか、坊ツちやまにも、さぞ御成人なさいましたでございませう。惡事はしても受けた御恩は、寢た間も忘却れはいたしませんから、思はぬ日とはございせんが、此の醜態でございませうからお尋ね申す因もなく失禮をいたしてをります」

「嫂様も光人も、邸の方は一同無事だ。伯爵は去年米國へおいでになつたが、貴様は恐らくまだ知るまい」

「へエー、御前様が米國へ……」

「うむ。貴様も知つて居る通り氷室家の寶庫といはれてをる氷室炭礦の事業擴張の上の必要から、彼地へ視察に出掛けられたのだが、もう一週間許りと經つて歸朝つて來られるので、其のお待受けに、家令の駒田も勸告めるから、例の山を獵狩立て、良い獲物があつたら、異つた御馳走でも爲てお喜ばせ申さうと、雪に乗じて出て來たのだ。うまく獲物があれば可いがなハ、ハ、ハ、ハ」と、快濶に笑ふ。

「では、御前様は、近々にお歸朝遊ばすのでございますか。それはまアお目出度い事でございます、そして列の山と被仰いますと、日外お供をしたことのございました五峰山でございませうか」と、芳造は眉を潜める。

「然うだ」と、正司は首肯いて、彼の山は氷室家の材木庫ともいふべき山で、同時に禽獸肉の冷蔵庫だ。ハ、ハ、ハ、ハ」と、復笑つた。

併し芳造は、ニコリともせず不安らしく首をひねつて、

「お詞ではございますが、いつもと違つて雪の跡でございませうから、あまり深入を遊ばさぬやうになさいまし。何しろ彼山は昔から恐ろしい場所でございますか

ら

「ナニニ大丈夫だ。案内の知れた邸の所有山だ」

「ではございますが曾而お供をして参りました時は、秋の晴れた日でございましたが名代の魔が谿のあたりは霧が甚く、一寸覗いて見てせエも身の毛が悚つやうに覺えました。どうぞお過ちのないやうにお氣をおつけなすつて下さいまし」

「有難う。氣をつけて行くから心配するな」と、正司は然して氣にも止めぬ風であつた。

が芳造の氣遣ふの道理で、談話の中の五峰山は、伯爵家の先代からの所有山で非常な高山といふでもないが、彼の赤石山脈につゞいて峰巒五つに岐れ、古松老杉鬱蒼と生茂り、晝猶暗き仙境である。殊に其の奥や、深く、魔が谿と稱ふ險所がある。千仞の絶壁刀して削れるが如く、谿底には遙に濼々として、巖に激する溪流（？）の聲は聞けど、常に霧深く立ち籠めて、見れども見えず、一と度歩を遅たば、忽ち深谿の底に墜ちて、そばだつ岩に身を碎かれ、骨も止めず粉碎するか、さらで

も溪川の藻屑となるか、世に物凄き險所である。  
當下、忽ち玄關の方で、勇ましい獵犬の聲が聞えた。

「お、エスが来た」と、正司は急に立上つて、

「芳造、伴の者が来たやうだ。ナマジ顔を見られぬ中に、切戸から早く去け」

(二三)

其處に、一步を過てば、忽ち生命を落すべき千仞の深谿がある、と爲れば誰しも怖れて且つ危み、漫に臨み近づくまい。が、さて、亦一寸覗いても見度いのが人情であらう。それとこれとは事異れど思ひも設けぬ光正伯の無情を、豫て忠良の聞え高き駒田家令が熱涙に顔ふ聲に聴き偽りならぬ證據にと、良人が渠に寄せしと云ふ密書を眼前に突きつけられ、芙佐子夫人は、其状を披いて悶るべく、心悸の轟くを禁め敢へず、恰も石を抱いて深谿に臨むが如く身内は戦き眼は眩めき、可怖き危険

なさ胸に充ち満ち、手に取るだに忌はしく感にれるが、さりとて悶度くないではない。否、此場合どうしても悶なければならぬ。見よ、自身の爲めには一身上の大問題が、係つて此の一書に在るのではないか！

「デ、デハ、拜見させて貰ひます」と、芙佐子は遂に意に決めて顔ふ手先を差伸べたが、その手は今、正に悲しむべき運命を掴まねばならぬのかと思ふと、熱い涙が雨と流れて、膝に假眠る光人の額に隕ちた。光人は可怖い夢にでも襲はれたか、一  
聲高くワツと泣出す。それをやをらた、きつつけつ、熱鐵を掴む如な心地で芙佐子は辛而良人の書簡を取上げた。嗚呼、此書を読まねばならぬか！世にいかなる殘忍冷酷な裁判官と雖も、囚人をして身自ら死刑の宣告書を読ましむるものはあるまい。  
書面はやうやく繰披かれた。

正視するに堪へぬか、當下駒田堅策は、うなじを垂れて唾を嚙むのであつたが、額越しに偷むが如く、芙佐子夫人の顔色を伺ふ。

用箋も封筒も異邦の物ではあるが、墨汁の色の淡く濃く、走り書きの鷺筆の跡は

紛ふべくもあらぬ良人の手跡で、駒田家令に宛てた一通。もうより期したる所ではあるが、読みもて行くうち芙佐子の面は藍のやうに蒼白めつ、持手はワナ／＼打顛ふ。

……然候へば分娩前早く彼女を邸に迎へ予が正室として發表致し置くを要するも、其以前に於て芙佐子を放逐し、いざといふ時の邪魔に成らぬやう致し置度存じ候。それには、其許に於て旨を含み弟正司と不義を働きたるやうにもてなし聞え、證據と成るべき何物かを作り拵へ置かれ度候。場合によりては、芙佐子光人の兩人共亡き者とする手段に出づるも亦據無かるべき歟。萬事は一切其許の計ひに打任せ候萬一、其許が例の道德説にて諫言など云々するが如き事あらば予は名譽を捨て、事業を抛ち再び彼女と手を携へて外遊の途に上らぬのみ尙ほ其許にして此秘密を洩らすが如き事あらば予が衣匣の拳銃は、芙佐子光人等の心臓に擬せらるべく、斯くして最後に予自身の前額に……

と、讀來つた時、芙佐子は書簡を取落して、其の上へ崖破と伏し絶え入るばかり咽

び入つた。

思案の外と謂は、謂へ地位と身分も省す、一賤婦の爲めに夫婦の情を去て骨肉の愛を忘れた良夫の所業は十年に近く連深ふて其の平生を知り盡して居る芙佐子には何様考へても信じからず思はれるが、現在良夫の自筆の書面、それが總てを裏切つてゐる。

「こ、駒田さん、な、何といふ情けないことでせう」

「ま、まつたく魔が魅したのでございます」

「悲しい事になりました」と、芙佐子は涙に身を淨くばかり。

「御胸中、お察し申上げます」と、泣聲を嚙んだが「夫人、最早御躊躇遊ばす場合はございませぬぞ」と、堅策は急に涙を拂つて屹といふ。

美佐子は良人の書簡を見て、頼みの綱も終に切れ果て、絶望の涙の淵に沈淪むのであつたが、斯くても猶ほ良人の家を去らうといふ心は無かつた。躊躇するなど堅策は勸ふが、何んでこれが躊躇せずに行われやう。

「駒田さん、御忠告は決して仇には聞きません、けれども、わ、私はどうも心が済みませんから、兎にも角にも御前様のお歸郷を待つて……」と皆まで云はせず、堅策は遮つて、

「夫人、夫人それは貴女何を仰有るのでございます。貴女様や若様のお身には、非常な危険が迫つて居るのでございます。イヤそれはモウ、貞淑な貴女様のお心では、たとへ一時にもせよ、不義の汚名をお負ひ遊ばされてお身をお隠し遊ばすのは、さぞ御心外に覺しめさることでございます。併し夫人、此處が大事の場合でございますぞ。情願お心をお鎮め遊ばされて、拙者の申すことをお味はひ下さいまし。御前様の御眼中には、たゞ小艶の色香あるのみで、最早氷室伯爵家の御名譽も、多年御苦心遊ばされました御事業も、乃至御最愛の夫人も若様

も全く御前様の御念頭には無くなつて了つたのでございます。御存知の如く御前様は、一旦斯うと思召したれば、是非ともに御貫徹遊ばされんでは措かん御氣象でゐらせられます。其儀は拙者申上ぐるまでもなく、御首肯の儀と心得ます。甚だ露骨ではございますが、御前様の御愛惜心のお強いことは、失禮ながら、曾て貴方様をお迎へ遊ばした折の其の御經驗に徴せられましたもお思ひ當りの事と存じられます」と、堅策は意味ありげに美佐子を警た。

美佐子はハツと面を紅潮た。

實際、自分が伯爵家へ歸た時の事の思ふと、自分ながら夢のやうに思はれる。その頃の自分の身分や境遇は如何であつたか。そして其際に於ける同族知友の反對に對して光正伯の態度は甚麼であつたか！

不束な自分を伯爵家の正室として容れることが能なれば、伯爵家を弟の正司に譲つて地位も名譽も兩から抛去り、一個の平民として心安く戀人と同棲すると、主張つた。斯の熱誠な愛情を一身に集めたのは自分であつた。當時自分は如何なる感

激を以て良人に對したであらうか。曰く、死！

實に、死を以て酬いるの外熾烈なる良人の熱愛に報うべき道は莫いと思つた。

が、幸ひにして良人の主張が貫徹して、自分は一躍伯爵夫人として今日あるに至つ

たもの、若し其の時、斯う成ることが能なかつたら………そも何う成つた事であらう？

其れを追想ひ合せると、今度の事もあり得べからざる事とは斷言ぬ。

美佐子は斯う思ひ到ると、猶且死ぬより外は無いと思つた。

火の如な熱い愛を得た時にも、之れに酬うべく思索して得たる答案は『死』であつた。

而して、遂に其の愛を失つて、氷の如な冷たい愛の殘骸を剩した今も亦、索めて

得たる答案は同是『死』である！

「夫人、お心得違ひを遊ばしてはなりませんぞ」と、顔色を讀んだか堅策は、美佐子の心を透視したやうに「こゝが大事の瀬戸でございます。お心が弱くては成り

ません。お心を鬼に遊ばして御決心をなさいます。拙者必ず生命に代へても、御前様を御本心に回してお目に掛けずには措きません」と、頼母しげにいふのであつた。

よしんば、自分に對する良人の愛が衰へて秋の扇と捨てられるとしても、單捨てられるなら捨てられもしやう。が、不義の汚名を身に受けて捨てるのは眞に辛く口惜い。同時に此まゝ死んでは骸の恥辱である。とはいへ、これが他人の讒訴の爲めならば、いつかは雪冤の日もあらうが、良人自ら事を構へて、無き名を負せたのであるから、何う言釋かう詮術もない。嗚呼、自分は最早『死』を選ぶより他、途は無いの歎？

『光人さへ無かつたならば……』と美佐子は生死の境に惑ふた。

X X X X X X X X

其夜、一臺の自働車が伯爵家の裏門から、何處ともなく何者かを載せて去つた。

隅田川の流を舐めて、横なぐりに吹きつける、氷刃のやうな築波嵐に顔へてゐるのは、庭に雪宿つ樹々ばかり。室内は電燈の光華やかに、床の盆梅も暢然と綻ひて物煮る香と酒の香に、留木を交へた溫柔郷。外の寒さを隔つ障子に描き出す男女の影。

「ぢやア何んですか、萬事段取が旨く連いて、いよ／＼ものに成りさうなんです  
ね」と、媚かしい女の聲調。

「然うだ、何もかも乃公の豫定通りに行きさうだ。まア乃公の手腕を見るがい、  
ハ、ハ、ハ、ハ」と男は宛も得意らしい笑ひ聲。

「それアまア耳よりな話ですわねエ。そしてお邸の財産といふのは、先般のお話の  
やうに、四五百萬はあるんですね」

「うむ、まづ五百萬は下るまい。それが追々此方の所有に成らうといふのだ」

「眞實に然う成ると旨いわねエ。まア前祝に、今夜は澤山お飲みなさいよ」

「飲む、大に飲む、併し飲むことも飲むが、それについてお前には是非肯いて貰はな  
ければならん事があるのだ」

「それアもう、斯うして何もかも打明け合つてゐる仲ですもの、妾の出来ることな  
らば何んでも肯きますわ。早く言つて御覽なさいよ」

「然うか、デハ話さう……だが、他に誰れも聞くものはあるまいな」

「ど、御念には及びません！先刻貴君が見わたした時、チャンと女中はお湯にやつてお  
きましたよ」

「さすがはお角だ。鬼の女房に鬼神といふから、やつぱりそこらに怪りはないな。  
ハ、ハ、ハ、ハ」

「いくら油を掛けたつて、もう此れつきり御馳走はありませんよ。その代り、熱燗  
いのを思ひ入れ飲まして進げますわ、ホ、ハ、ハ、ハ」



「好矣ッ酌いでくれ」

「それで、そのお話といふのは？」

「まア急くな。飲みながら寛りと話さう。まアお前も一つ飲れ。ドレ、乃公が酌をしてやらう」

「憚り様。だげぞ、あなたがお酌をすると男酌だわねエ。ホ、、、」

「ところが伯爵家を呑まうといふのだから可笑しい、ハ、、、」

「ホ、、、」

「そこで今の一件だが、なア、お角、お前もう一度、出てくれんか」

「エ、出る？出るおいひですと……」

「讀んで字の如し！もう二べん藝妓に出てくれるといふのだ」

「アラいやだ。つまらないことは云ひつこなしにして下さいよ」

「ふむ、可憐だといふのか」

「可憐でもあらうぢやないの。まア考へても御覽なさいな、四五百萬 財産を横領

かさうといふ、旨い話の矢先に、復藝妓に出るなんて……」

「イヤ、突然に斯ういつたばかりでは、解るまい。お前が聞いたら迂遠いと思ふかも知れんが、乃公の考へは斯うなのだ。今もいふ通り伯爵家の資産は動産不動産を一括めて先づザツト五百萬、中にも甲州の炭鑛は、伯爵家の實の山で、實際將來何千萬圓になるか知れんのだ。それをヌク／＼此方の物にしやうといふには、並大抵の事では行かん、此際是非非常手段を取らんければならん」

「それアもう然うでせうともサ」

「ところで、かねて話した通り當の伯爵は去年から米國へ行つて居つたが、今度無事で歸朝つて来る」

「アラ、無事で歸朝つて来て了つちやア困るぢやアないの」

「イヤ、そこが乃公の目の着けどころなのだ。だから先づ伯爵の歸る前に、先刻話して聽かせた通りの手段で今夜夫人と嗣子を例のどころへ押込めて了つたのだ」

「その事は聞きましたわ。それは可いが何故妾が藝妓なんぞに出なければならぬ

の？」

「先ア聴け。まだ其れは序幕に過ぎん。これからが性根ン場だ」

「なんだか大變に複雑つた狂言らしいのね。ホ、、、」と、潜めながら囁いだ笑聲。

「ハ、、、、それア脚色も錯雜つて居らうサ、旨く當れば藏入は五百萬圓、さしづめお前が立旦だ、ハ、、、」と男も笑つた」

〔一六〕

「而して、妾が藝妓になるといふ理由は？」

「だからよ。伯爵が歸つて來ると夫人は何處かへ雲隠れ孔子の從弟でも孟子の甥でもムシヤクシヤする。いくら賢明でもお惻恰でも謂は、凡夫の伯爵だ、戀女房に逃げられて自暴にならずに居られるものか。其處を此の原田甲斐が腹心の和助や

三左衛門に吩咐けてナ、ソレ、そこでお前が高尾といふ役廻りになる段取だ」

「ア、それぢやア妾が藝妓に出て、御前を旨く欺し込んで……」

「伯爵夫人に早替りといふケレンよ。解つたか」

「解りました。而して妾がお邸へ乗込んで、あなたと二人で心を合はせ、伯爵家を

脱にして丁へば可いのでせう」

「豪いッ、正に其通りだ。一つ踏ん張つて行つてくれ」

「行りますとも、その位な事をやり難るお角ぢやないわ」

「ぢやア會得んだな」

「エ、すつかり會得んだわ」

「會得んだからには、藝妓に出るのも承知だらうな」

「それが肝腎要じやないの。然う事が解りさへすりア、二度の勤めも慾徳づくたわ善は急げといふから、妾、明日にも新橋の姐エさんのところへ頼みに行つて、すぐに披露目の準備をするわ」

「頼みに行くのは可いが、迂闊した事をいふてはならんぞ」  
「大丈夫、斯のお角さんは、それほどドチではございませんよ、ハイ」  
「ハイ、誠に恐入りましたハ、ハ、ハ、」

「ぢやアそれで最早此方のものね」

「母子は此方の掌の中に握つてあるし、お前さへ巧妙く腕を揮へば、筋書通りの大詰が出やう」

「だけど、横合から飛んだ松前鐵之助が出やアしなくつて？」

「その鐵之助より邪魔に成るのは、伯爵の弟だ。年齢は若いが兄優りのしつかり者で、分別もあり腕も強いが、欺すに手なし、好きな狩獵から持込んで、生命を捨てさせに遣つたから、まづその心配は無いつもりだ」

「大分よいお手廻しでいらつしやいますねホ、ホ、ホ。だが大丈夫？へ、へをやつちやア大變よ」

「何有、さう心配するには及ばん。乃公の服心の者を二人ばかり附けてやつたし、

いざといふ時の用心に其奴等が懇意のならずものを加勢に頼むやうにしておかせたから萬に一つも遣り損じはあるまいよ」

「さう聞くと少しは安心だけれど、謂つて見れア大事の前の小事ですからねエ」

「フ、ツ、お前却々乙な事を知つて居るな」

「アラ、冷笑ツちやア可嫌よ。演劇で能くいふ臺詞ぢアなくつて。ホ、ハ、」

「ハ、ハ、」ど、世にも恐るべき罪惡を、平常茶飯事の如く、談笑の間に謀つて、さも愉快氣に聲を合せて笑ふのであつた。

そも斯の男女は何者であらう？夜の帳深く垂れて、寒風吹き荒む戶外には、漆のやうな闇が、ひた／＼と寄せて居る。が、明るい電燈に照らされて酒酌み交す、男女のもの、肚裏は、この闇よりも更に黒い！

兄の歸朝の饗宴に珍味を添へて喜ばさうと、その温かい心から、冷たい雪を事もせず、獵銃を肩にして東京の邸を出た氷室正司はゆくりなくも舊塚口芳造に邂逅したが、その罪を悪んでその人を憎まず、若干の金を恵み、涙を濺いで意見を加へ、人知れず立去らせた後、伴の書生を指揮して山籠りの準備を調へさせ、その夜は其旅舎へ一宿した。

地は甲信の境に在つて、雪に寒さも一入の、逆旅の寢覺めに幾度か、芳造の事を想ふては、彼れが前途の直くあれ、幸多かれと眞情を傾けて心の中に祈るのであつた。

多寡が門番の子ではあるが幼い時から同一邸の内に育ち、年齢さへ同年であつたから、身分の相違で學校こそ異なれ、家庭に於ける復習も俱にすれば、遊戯も共に共にして、睦み交した竹馬の友、其友が心の置所で、見るかげも無く墮落して賊を働くに至つたかと想ひ到ると、會ひもせず見たことも無いけれども、彼れを其處まで墮落させた原因と聞く其婦人が、心の底から呪はしくも成つたり、分袂れて去つ

た芳造が、まだ眞實に改心せず、再び悪事を働いて、其筋の手に捕はれ、又もや暗い牢獄に繋がれて、冷たい鐵窓の下に呻吟する身と成りはせぬかと危ぶまれましたり、空想に聯つて、旅寢の夢は圓ならず、兎角するうちに永い冬の夜も漸く明けて鶏の聲が聞え出した。

正司はやがて起出で、朝餉もそこへ結束して、誰よりも早く旅宿を出た。愛犬エスは高く吼えつゝ、主に後れじと驀地に駆ける。

伴の書生は寒さうな顔をして一人は天幕を、一人は食糧品をひと背負つ、背負ひ込んで、一町ばかり正司に後れつ、何か狐鼠々々耳話しながら、跡に跟いた。

朝も早し、それに寒氣が強いので、路次に降積る雪は往昔のまゝ、凍つて居るので冷たけれども泥濘るまじ、歩の運びも存外早く、既に一里も来た頃に漸く旭影が東の山の端を這つて、消ぬのこる鎮守の社の家根の雪にきらめくのであつた。

我れながら軍隊で鍛錬へた歩武の早さに、及びかねてか遙に後れた伴の書生を待ちかねて、口笛緩く吹遊みつゝ、正司は頻りに前進むのであつた。

エスは主人の歩調に倣つて、或は急く、或は緩く、耳を動かし尾を揮りつゝ、後になり先になり、さも嬉しげに隨いて行く。

「オイ甲斐澤、乙倉も如何したのかッ」

正司は怵えかねて大聲に伴を呼んで、路傍の捨石に腰を卸しつゝ、葉卷の煙をゆたかに吹く。

「イヤ、どうもおみ足の早いので、スツカリ汗になりました」と、やつと追ひつゝ、甲斐澤といふのが、サモ仰山らしく額を拭くと、

「何しろ荷物があるものでございますから」と、乙倉も分疏らしく頭を搔く。

「ハ、、、、弱い奴等だ。其位の荷物がそれほど重いのか、二人共にいくぢの男だ。なんなら乃公が背負つて行かうか」

「イエ、ナニ、それほどでもない」と恐縮するのを、正司は興ありげに微笑んで、

「では、さつさと歩くがい、モウ麓へ半里ばかりだ」と、勢ひよく立上つて、肩

の獵銃を揺上げつゝ、例の濶歩に歩き出した。

〔一八〕

正司等の一行は、兎角して目指す五峰山の峠に着いた。

「さア、これから上りだぞ、しつかりしろツ甲斐澤は一度伴れて来たことがあるから道筋にも記憶があるだらうが、乙倉は初度だから氣を着けて行け、道は右へ右へと螺旋形に廻りながら進むのだ。左側に注意せよ、崖の勾配が急だぞ。凍つてをるから雪に迂るな」と、正司は伴の書生に注意をしながら先に立つ、エスが其の脇を衝と抜けて、心得に眞つ先を駆けるのであつたが、折々立止つては鋭敏に其の鼻を蠢かしつゝ、低く唸るのは、何か獲物を發見けるのかと正司は軽く微笑んで、

「エス、まだ早い、今から獲つては荷物になつて、甲斐澤や乙倉が益々閉口してし

まはう、ハ、ハ、ハ」と、笑つたが、不圖雪に残る足跡を發見して、  
「ハテナ、誰か山へ登つたやうだナ。ム、ム、、だいぶ多勢だと見える」と、首をひねる。それを聞くと何故か甲斐澤と乙倉とは悸乎としたらしく目を合はせた。

「獵師かナ……それとも木でも盜伐まうといふ太い奴か……？」と正司はしばらく考へて、猶も其の足跡に注目しつ、「ム、ム、登つたまゝで降りた來て形跡がない……ハテナ、一體何者だらう？」

「こ、ことによると此邊の獵師かも知れません、此雪で獲物が有らうといふので、……それに今日あたりマサカ若様がおいでにならうとは思はんでせうから……」と甲斐澤が口を挿れる。

「或は然うかも知れん、怪しからん奴」と、眉を擡めたが、急に氣を替へて、  
「マア可い、どうせ何處かで出會ふだらう」と、さつくと登り始めて次第に山深く分入るのであつた。

「若様、だいぶ登りましたやうでございますナ」と乙倉は喘々息を切りながら、糧

食の荷を重さうに幾度か揺り上げる。

「まだ〜これからだ。  
今ツから草臥ては不可んぞ」と、正司。

「ナニ、草臥はしません、袋の中の鐘詰が、歩く度にゴツン〜と脊骨に當るので痛くつて仕方がないです」

「ハ、ハ、ハ、鐘詰と道行も面白い。乃でお汝の名を長右衛門と改めると尙面白いナ  
何、何故でございますか」

「何故といつて、ソレ、おくわん長右衛門の道行になるではないかハ、ハ、ハ、ハ、と笑ふのであつた。

「若様々々」と殿り顔に最後に居た甲斐澤は、急に正司を呼掛けて「モウ、魔ヶ谷へは、程がないやうでございますナ」

「うむ、モウ十二三丁といふところだらう。ヤツ、エスが何か見つけたらしいぞ。  
オ、兎だツ」と、正司は手早く硯ひを定めて、撞と一發。

「命中！」乙倉は頓狂な聲を發す。

「いつもながら若様のお腕前には恐れ入つたですナア」と甲斐澤も感歎する。

「おだてるな、ハ、ハ、ハ」と正司は笑つて「だが、これでも軍隊に居つた時分から

射術にかけては、まだヒケを取つた事がない正司だ」と、戯れに得意らしい態度

を示して呵々として哄笑ふ。

「ハア」とばかり乙倉は、何故か少し悄氣たやうに、甲斐澤と顔見合せた。その間

に正司は兎を綱で縛つて「乙倉、お汝の腰へ着けて行け」と、手自ら其の腰へつ

けてやつた。

山路は漸く深まざる。

正司は道々選みうちに、幾つかの獲物を増した。

「さア、もう五六丁で魔ヶ谷だ。併し山路が険しいから、二人とも十分に氣を注げ

ろ」と、正司は凍る雪路を、ザク／＼と踏みしめて注意深く先に進む。

「若様、お危険ふみますぞ」と甲斐澤が背後から聲をかける。

「好矣、乃公は大丈夫だ。乙倉にらんやうに用心しろツ」と、正司は、生路の乙倉を氣遣ふ。

今までさら／＼と照つて居た日が急に曇つて、肌を劈くやうな朔風が、樹々の梢に大濤を寄せるやうな物凄じい音をさせて吹嵐すと天地は忽ち灰色に化つて、粉のやうな雪が狂ふ。

「ヤツ又雪になつたナ」と、正司は屹と空を見上げた。

〔一九〕

「オイ、皆しつかりしろ、何しろ對手が對手だから、迂つかりしちやア不可んぞ」ど、首領めかして肩を聳やかしたのは、古ぼけた脊廣に半窄袴を穿いて、防寒帽がらギヨロリとした目ばかり出した巖丈な男である。

「ナーニ大敵と見て怖る、勿れだ、此方も其の氣でかゝるから心配するには及ばへ

「サ」とこれも怪しげな洋服扮装の髻ツ面の男がいふ。  
 「さうだともく、いくら對手が腕つぶしが強くとも、われくが斯う團結してかゝれば一も二もあるものか」と、それを承けて横ツ面にひつつりのある、人相の悪い男がいふ。

「イヤ、さう呑んでかゝつては不可不可、何しろ對手は豫備陸軍歩兵中尉で、射術と銃劔には隊中無敵といはれた奴だ、加之ナ、柔道も講道館で三段といふ腕前だといふから、決して油断は成らんぞ」と、目ばかり帽子が注意する。

「エツ、柔道が三段の腕前エだつて、そいつア滅法界エに豪勢エに、たいしたものだなア」と、中で少し愚ぬらしい男が驚異の目を見張る。

「馬鹿ツ、何を感じしてゐるんだ、ダガ隊長株の君からして、盛んに敵を責めちぎつて、味方の勇氣の挫けるやうな事ばかり云ふのは不可んせ」と、ひつつりがまづい顔をする。

「併し、念には念を入れろだ、イザといふ時仕損じのないやうにするのが吾輩の任

務だからナ」と目ばかり帽。

「何しろ、斯う寒くつちやア遣り切れん。ヤレく又降雪て來やアがつた」と、他の一人が吐く。

「では、氣附けに一ぱいづ、飲らかさう」と、例の目ばかりは肩に掛けた水筒のウ井スキーを一巡り注いでやる。

「美味いッ、とひつつりは舌鼓を打つて『これで、大いに勇氣を恢復したぞ』

「君はいつでも酒さへ飲めば、盛んに勇氣を恢復するな。アハ、」

「勿論だ、俺ア酒の爲めに、斯うなつたんだ。毒食はば皿だ、飲んで飲んで死ぬまで飲む』

「ハ、ハ、ハ。君のは毒飲まば猪口までもだらう』

「ナニニ徳利までも嚙るだらうせ。ハ、ハ、ハ、」

「だいぶ皆元氣づいたなア」と、目ばかりは、僅かに出した眼で笑つて、

「ダガ、あんまり飲んで酔ッばらつて了つては大變だ。何しろ此頭へ久しぶりで三



百圓といふ金が入るんだ。旨くさへ行けば、これから先は無盡蔵に金のなる木が出来るんだから、うんと踏ん張つてやつて呉れんちや不可んぞツ」  
「大丈夫だ、吾輩が附いてゐる安心し給へ」と、髯ツ面がニヤリと笑ふ。  
「いくら強い知らんけれど、敵は單身だ、衆寡敵せずといふことがある。ナニ糞ツ、めつたに不覺を取るものかツ」と、武者振ひか胴顛ひか、襟元に降り込むのを拂ひながら力むのは引ツ釣りであつた。

「オー〜ひとく降つて来たナ、ヤツ彼處へ見えるのは夫れらしいぞ」と、指して目ばかりが目排せすると、一同はその指す方をふりさけ見た。

次第に降りまさる雪に遮られて定かには判れぬけれど、谷を隔てた峠路を登つて来る三人連れの男が見える。

「ム、たしかに然うに違ひない。先方の目に入つちやア拙いから一人々々に木隠れをして、吾輩の合圖を待つて居給へ」

「よしツ、隠れろ〜」と彼方の木蔭、此方の岩蔭へ、夫れ〜一時身を潜めた。

雪はますます降り頻つて、見る見る狼藉たる足跡を隠して了つた。

〔110〕

雪は更に小歌みもなく、絶頂から吹き嵐す風に舞ひ、谿谷より吹き上げる風に狂ひ、卍巴と降り亂れる中を、寒さに萎けて首も縮めず、正司は積雪を蹴立てつ、魔ケ谿近くさしか、つた。二人の供も喘ぎ〜、後れじと跡につ〜、正司は不圖立止まつて、

「エスは什麼したツ」と顧る。

「今まで先に立つて歩いてゐたやうでしたか……」と甲斐澤は四邊を見廻して「多分兎の穴でも嗅ぎ出して、探險に出かけたのでせう」と、云ひ補した。

「然うかも知れん」と、正司は合點いて「彼犬は實にマメな奴だ。お前達もエスに負けず、もう少し活潑にしるよ。なんだ其の寒さうな顔色は……。ハ、ハ、ハ、」

「ですが、實際寒いです」と乙倉は涕汗を吸る。

「ハ、、、、弱い奴だな」

「併し若様、だいぶ深入りをしましたが、もう魔ヶ谷でございませうナ」と甲斐澤はキヨロ〜する。

「お前は魔ヶ谷々々、ひどく魔ヶ谿を氣にするが、マサカ飛込む了簡でもあるまいな」

「ちよ、冗談を仰有つちや不可ません」

「オ、兎角いふ中魔ヶ谷だ、見ろ、アノ雪の亂れ狂つて、濛々と煙のやうに渦を巻く壯觀を！」と正司は急歩に近づいて脚下の深谷を指さし示す。

「こ、これが魔ヶ谿といふのでございませうか」と、乙倉は、怖る怖るさしのぞく。謂ふ所の神斧鬼鑿、斷崖急に峙立つて、直下千尺、唯一枚の岩より成つて、足が、りも手が、りもない、颯々と吼える吹雪は、その谿間に荒れ狂つて、吸るに目も眩れ足も顛ふばかりである。

「嗚呼、實に壯絶だ」武夫の箭並つくらう籠手の上に、霰たばしる那須野篠原一ア、何んといふ勇壯な看だ！」と、正司は持てる獵銃の臺尻を丁と杖いて、眉を昂げた。

「實際」奇觀でございませうナ。」と甲斐澤は相槌を打つのであつたが、その眼は却つて、あらの方に配られて、頻りに何者をか物色する態である。

「こ、が魔ヶ谿といふ處でございませうか」と、乙倉が及び腰でさしのぞく。

「然うだ、これが有名の魔ヶ谿だ、昔から人でも獸でも此谿に墜ちると、再び上つて來たことがないといふので一名は無底谿ともいふ、昔は此谿等を魔所と稱して誰も近寄る者が無かつたといふ傳説だ」

「な、な、何んだか斯う氣味が悪いですナア」と、乙倉は逡巡する。

「ハ、、、、臆病ナ奴だな。それは可いが、甚く降つて來たナ、これでは鼻の先へ大きな獲物が飛出して、狙ひも何も附きはせん」

「これア今夜の露營はこたへませうナ」と乙倉は澁面つくる。

「それも却て面白からう、ナーニ五日や十日下山れんでも、三人でその位は食べる丈の兵糧はあるサ、ハ、ハ、」と、正司は事も無氣に笑ふ。先刻からキヨロ〜とそこら一圓を見廻してゐた甲斐澤は、此時何を見つけたかニヤリと笑たがさあらぬ體で、

「まつたく、ひどい雪でございますナ、晴れた日だと、氷室炭鑛が、こゝから遙に見えるのですがナア」と、咫尺も別かの降雪の裡に、遠く眼を放つたのであつた「然うですか、こゝから炭鑛が見るのですか」と、乙倉ものび上る。と、正司も釣込まれて、

「見るとも、丁度こゝから眞北に方つて、巍峨たる其の山嶺が望得るのだ」

「此處から全體、何里位あるでございませうナ」と甲斐澤が問ふ。

「左様サ、直徑二十五六里はあるだらうナ」

「随分遠いですナア」と、いひ〜甲斐澤は乙倉に目配せしつゝ、窃と脊負つた荷物を卸した。

それ氣附かはせまいと、乙倉は頻に前面を指しつゝ、

「スルト、そゝ炭鑛は此處等の見當に方りますか」

「それちや全無方角が違ふ、もつと斯う右の方だ」と、我知らず伸上つて指示す、隙を狙つて背後から聲をもかけず甲斐澤は、満身の力を双腕に籠めて、矢庭に正司の腰を突いた。

脚下は底知れの千仞の深谿！

〔三二〕

腕力を極め腰を目掛けて、甲斐澤が突いた時、不意を打たれて氷室正司は、世に怖ろしき魔ヶ谿へ眞ツ逆様に陥つた歎、否。

心懸けある正司には、些かの油断も無かつた。間一髪にして危くも翩然と翻はした、身の軽きこと目にも止まらず。咄嗟と見る

間に空を突いて、踏み出た甲斐澤の、襟髪をムツと掴んだ。

「こらッ貴様何を爲るッ」

怒聲は百雷の如く、研した。

「ど、ごめん下さい、つ、つひ其の雪に迂りまして……」

「云ふな甲斐澤ッ過誤つて爲たことか爲ぬことか、それほどの事が判らぬ正司と思ふかつ、貴様は乃公を此の谿へ、突落さうとしたに相違あるまいッ」と、正司は断じて許すまじき顔色。

鷹に擒られし雀の如、いかに藻掻けど大力に押へられて力及ばず甲斐澤は蒼くなり赤くなり。

「乙、乙倉、た、助けてくれ。だ、だ誰か来てくれッ」と、苦しげに悲鳴を絞つたど、忽ちバラ〜と物陰から、立現れた最前の怪しい奴等が、

「甲斐澤ッ、しつかしろ」

「おれ達が出れア大丈夫だッ」と、口々に聲援をつけてムラ〜と、正司の身邊に

肉薄した。

「ム、貴様等は共謀者だなッ此の正司を甚麽するのかッ」と、猶も甲斐澤を捕へた手は緩めず、勢ひ猛く衆に對した。

その勇ましい猛威に怖れて、悪漢ども、一旦は逡巡したが、例の目ばかり帽が多勢を待んで。

「それ、殺つて了へッ」と、合圖をすると、手ン手に柄物を振り舞はして、正司を

目蒐けて撃つてかゝつた。正司は怒髪逆様に立つて群り競ふ悪漢の眞つ中央へ、礫を取つて甲斐澤を投げつけた。

其間に乙倉が落散る獵銃を奪つて逃げかゝる。

「乙倉ッ、貴様もかつ」と、正司の怒りは絶頂に達した、掴み挫がんとした一刹那今まで影も見せなかつた愛犬のエスが、雪を蹴立て宙を飛んで駆けて來たが物凄いな唸りどゝもに、乙倉の向脛へ嘴附いた。

乙倉はワツと魔へて飛上つたが、背負つてゐる糧食の荷の重味に中心を失つて、獵銃を握つたまま、荷物とともに谿底深く陥つた。エスも彼れに噛み附いたまゝ、同じ谿間に墜落たのである。

もとより其れは一瞬間で、押へる間も何もない。正司はアツと叫むだが、愛犬の死(?)を悼むよりも、自らを衛るに急な場合で、隙もあらせず打つてかゝるのを、身を翻し、空拳を揮つて手元に飛込み一々柄物を打落とし、組んでかゝるを組ませもやらず、得意の柔道で投げ退けたが、前方の敵を闘かふ間に背後に廻つた二人の奴が、隙を計り入身になつて、無手とばかりに左右から組着いた。

正司は兩脇に敵を受けたが、更に萎む色も無く、精神益々加はつて、兩の腕に力を集め、矢聲鋭く絞めつけた。

目ばかり帽に拳銃を擬してゐたが、今や三人一塊に成つて、曳や曳やと揉み合ふので、狙ひをつける當所も無く、残る一人と甲斐澤も、柄物は持てども打込むべき機会が無いので、唯徒らに聲を洩らして、仲間力をつける許り。

正司は目敏く拳銃を見て組着いた、敵を楯に巧に筒先を避けながら、二人の奴が必死になつて押倒さうと犇めくのを、反對に捻倒さうと力を極め、術を盡して角力ふのであつたが、三人が烈しき力足に、遂に斷崖を踏崩して、引ッ組んだまゝ、彼れ此れひとしく、吹雪狂ふ魔ヶ谿へ、岸破とばかりに陥つた。

〔三三三〕

「お母ア様、此家は何處なの？何故こんなところへ來たのです、早く歸邸りませよね。ね、ね、お母ア様」と、光人は鼻を鳴らす。

「光人さん、あなたは何んにも御存知ないけれども、當分邸へは歸られないのですよ」

「何故？、エ、お母ア様……」

「エ、何故ようお母様」

「何故といつて、光人さんにお話をしても、解らない事なのです」と、美佐子は横を向いてソツと眼頭にたまる涙を細い指先で拂ふのであつた。

「だって、僕、寝んねしてゐるうちに、こんなところへ来てしまつたのですもの、僕こんな淋しい處は嫌ひです」と、光人は頑是がない。

「嗚呼無理はありません、よく寝んねをしておいでのうちには、こんなところへ伴れて來たのですもの、さぞ吃驚したでせうねエ」と、美佐子は光人が何んにも知らぬだけ不憫さも一入増す。

「エ、僕、ほんとにびつくりしたの。朝起きると、僕のお邸と、違つて居るのですもの」

「エ、く然うでせうともねエ」

「だけど、僕、然う想つたの。ア、僕、きつと夢を見てゐるのだと」

寔に、夢のやうに思ふのは唯り光人のみではない、其母も亦、きのふから夢路を

辿る心地である。

「夢……夢ならばいい、のですけれどねエ」

「アノねエお母様、僕ね、此間喜代やに讀んで貰つたお伽噺のなかに『夢の國』といふのがありましたの、それはねエ、或る所に太郎といふ兒があつてねエ、その兒が大へん親孝行なの、だけど、お家がびんばうなのですつて』といひかけたが急に『ねエお母様、びんばうツて何アに……?』と聞くのであつた。

美佐子は覺えず淋しく笑つて、

「喜代やは何と申しまして?」

「アノねエ、喜代やは、そんなことは御存知ない方がよろしいつて、どうしても話してくれなかつたの」

「それは、喜代やの申す通りです」

「でも、僕、解らないのですもの、ねエ、お母様教へて下さいね」と、甘へかゝる。

「……………」

「お母ア様も知らないの？」

「然矣」

「じやア仕様がないなア」と、光人は不満さうな顔をしたが「それでね、その太郎には、お父様が無いのですッて」

「まア、お父ウ様が無いのですか」

「エ、無いのですッて、僕は好いなア、お父ウ様もお母ア様もあるンだ！いなア」  
「お父ウ様はモウ直きに歸朝ッていらッしやるのだから好いなア」光人はお伽話のつゞきも忘れて、嬉しさうに身體を揺るのであつた。

美佐子は袖口を噛めて静呼と俯いた。

昨日からの憂慮に、一と目も寝ぬ疲労も加はつて、亂れた鬚の毛のほつれかゝる蒼白めた頬に、思ひ做しか、やつれも見える。

「アラ、お母ア様、泣いてらッしやるの？」

光人は驚いたやうに目を睜る。

「イ、エ」と美佐子は、忙はしく涙を隠した。

(二三)

罪無くして見ばやと希ひけむ配所の月のそれならなくに、身にふりかゝる冤罪に駒田家令が勸告に従ひ、心ならずも番町の邸を抜けて、鄙下る柳島の、駒田が知合ひとかいふ唯有る家へ、何暗からぬ身を潜めた美佐子夫人は、いつもならば和歌ともなるべき物珍らしき片田舎の、雪むら消えの野面の景色も、思ひある身は目を樂します因とはならで、うら淋しさの森々と胸に逼りて、たゞ涙ぐましくなるばかりである。

加之顔はない光人が、何にも知らずに、伯爵の歸朝を楽しみにして待つて居るのを見ると、身も世もあらぬ心地がする。

「光人さん、あなたは……」とばかり、胸が迫つて、堪へに堪へた溜涙が、雨のやうに落ちるのであつた。

「お坊様、おさみしいでございませう」

と、次の間から入つて来たのは此處の留守居とかいふもので、一寸見は可怖いやうな顔をしてゐるが、言葉づかひや、ものごしは存外やさしい老婆である。

美佐子は涙を見られじと、急に顔をそむけて、いそいで袖口で眼を拭いた。

「ほんとにマア、お大人しくつておいで、ございませうことねエ」

と、老婆は剥げた塗盆に、かき餅のつけ焼を入れた皿を載せて光人の傍へさしおいて、

「さア一つめし上れ、お坊様はおいしい物ばかり食りつけて、ございませうから、どうせお口には合ひますまいが、まア一つ召あがれ」と、光人にすゝめて「何を申しまして貴君、田舎の事で、何んのお愛想もございませぬホ、ホ、ホ、」美佐子を見ながら、黒ずんだ齒莖を出して笑つた。

「眞實に、飛んだ御厄介をかけて、お氣の毒です」と、美佐子はやつと聞えるやうな聲。

「い、え、あなた、何ういたしましたして厄介も何もございませぬ。お氣の毒と申すのは、却て貴女様の事でございませうよ」

「エツ、では様子を……」と、美佐子は、胸を悸かす。

「ナニニ貴女、別にくわしい事は存じませんが、一寸駒田様から伺ひますと、旦那様にお見捨てられ……イエ、ナニ、旦那様が女狂ひを遊ばして無理難題を仰有るとかで、ほんとにお氣の毒でございませぬエ」

「……………」

「イエ、モウ、わたくしなんぞも若い時覚えがございませうよ。モウモウ、男といふものは、何故アンナに浮氣なものでございませうかねエ貴女、自分は歴乎とした女房がありながら、彼方でも此方でも、勝手放題に情婦をこしらへたり、お酒を飲んだり、ドドのつまりは可愛い子供までも邪魔にして夫婦の情愛も、親子の情



愛も、何もかも忘れて了ひ、揚句の果ては其の情婦を伴れて駆落をしたり、然うかと思ふと、可愛い女房子を叩き出して、その情婦を家へ引ずり込んだり、イヤモウ爲度い三昧なことをするぢやアございませんか、オヤお坊様何故めしあがらないのでございます。まア一つめしあがれよ」と、盆を押す。

光人は一寸見たばかりで氣味わるさうに身を避ける。

「ホ、、、お嫌ひでございますか」と、まゝ美佐子の方を向いて「ネエ貴女、ほんとに男といふものは、得手勝手なものでございますねエ」と、水を向けるやうに話しかけたが、美佐子が黙念としてゐるので、や、拍子ぬけの形ちで、

「デモ何んでございますねエ、同じ男でもアノ駒田様のやうに、御親切ナ、頼もしい、實に行届いた、結構ナ方もございますよ。わたしなんぞ、コンナ敏くちや婆アではございますが、もしモウ三十年も若ければ、薄情ナ亭主なんか思ひ切つて駒田様のやうない、旦那に添ひたいと思ひますよ。ホ、、、」と、高く笑つたが黒い眼に斑な齒、醜く歪めた口の邊が、美佐子には可厭に見えて、何は知らずゾ

ツとした。

(二四)

留守居の老婆は口を極めて駒田家令の親切を賞め立て、心有りげに美佐子の顔を凝乎と見たが、彼女が黙然とさしうつむいて、端然と正坐つた膝に置いたわが指先を見詰めて居るばかりなので、拍子ぬけの氣味に押黙つたが、更にまた話題を轉じて。

「それは然うと、お坊様は、コンナ片田舎へおいでになつて、さぞ御退窟でございませうね、チト、婆アがそこらへお供を致しませうか」と、機嫌を取りかけるのであつた。

が、光人は母へピッタリと身を寄せて、例の氣味悪さうに、老婆の顔を偷み見るのであつた。

「有難う」と、美佐子は引ッ取つて「人見知りをして困ります」と、分疏らしくいつて淋しく笑ふ。

「それはモウあなた、御身分のお有りの方のお坊様でございますもの、此處等邊の田舎ツ兒の我殺な無遠慮ななどは譯が違ひます。お羞耻み屋でいらつしやる方が可愛らしくつてよろしうございますよ。イエ、モウ、お立派なお暮しを遊ばす方から御らんじやればわれ〜みたいな貧乏人は、全然あなた、蟲ケラ同様なものでございます。禮儀も作法もありは致しません、ホ、ホ、ホ、」と例の眼を出す。「びんぼう？」と、光人は老婆の顔を珍らしさうに見た。自分も知らず、母も知らぬ其事を知つて居る物識りな老婆が、珍らしく思はれたので……、

そんな事とは知らぬ老婆は、光人が唇を發いたので、これもまた珍らしさうに、「ね、お坊様、貧乏人は駄目でございますねエ。ホ、ホ、ホ、」と笑ふのであつたが、その笑顔が過般小間使の喜代に讀ませたお伽噺の夢の國の中に在る挿書の、好んで小兒の生贖を取つて喰ふといふ、梟の精の化た婆々アの顔に似て居たので、

光人は可怖げ立つて、思はず犇と母の腕に縋るのであつた。

「まア、お坊様は、どうしてソナナにお母ア様のお傍にばかり平張着いておいでなさるのでございます。まア一度婆々アにお抱ッこを遊ばせよ」と老婆はヤハリ世辭のつもりで、光人の手を取つた。その手は氷のやうに冷たかつた。

「可嫌ッ」と、その手を振放した光人は、伽話の中の妖婆の手が冷たいといふのを思ひ出して、生贖を取られでもするかのやう、ブルブルと身震ひして、泣き出しさうな顔をする。

「オヤ〜、これは婆ア大失敗でございますホホ、ホ、」と、笑つたが、その面には不快の色が見えた。失意の地に在る美佐子には、それを見逃せなかつたので、「光人さん、何んですね」と、我知らず叱るやうにいつて「ほんたうに困つた人でございます」と詫びるやうに老婆に言つた。

「イエ、お大人しい方が結構でございますよ」  
普通に言つた老婆の詞も此場合美佐子の耳には皮肉らしく當着けられるやうに響

いたので、急にうつむいて了ふのであつた。  
杖ども柱ども頼む最愛の所夫に見放されたと思ふヒケがある身には、草にも萱にも心が置かれる。

「オヤ、迂ッかり長ツ尻をして丁ひました。あなた、まア御免下さいまし、お坊様仲好に成りませうね」と、やをら老婆は次室へ去つた。その後姿を見送つて美佐子はホツと吐息を吐いた。

## 〔二五〕

薄氣味わるい留守居の老婆が次室へ去つたので、光人はやゝ元氣を恢復して、再び伽話の後をつゞけ出した。

「それでねエお母ア様、太郎のお宅がびんばうだものだから、お母ア様がお山へ木を拾ひに行へんですつて、そして太郎は親孝行だから、そのお手傳ひをするんで

す。よウお母ア様、聞いていらつしやいよウ」

「エ、聽いて居りますよ」とはいつたが、美佐子の心には、寛ろいで光人のお伽噺に耳を藉す餘裕がなかつた。

「それから甚麼したのです」と半ば無意識。

「でね、ある時太郎のお母ア様が例のやうに山へ行つたのです。太郎は學校の歸り途にお友達が轉んで怪我をしたので、それを送つてやつたので、いつもより歸宅がおくれたのです。それでねエお母ア様、お宅へ歸つて見ると、お母ア様はまだ山から歸宅つて来て居ないの。太郎は大へん心配して、お母ア様を探しに出たのです。けれども、どうしても知れないの。エ、お母ア様ツてば！」と、光人は、美佐子が應答へをしないのでその膝を頬に揺る。

「ア、然うでしたか」と美佐子は、取つてつけたやうな返詞をする。

「お母ア様、解ツて？お母ア様の行つたところが何うしても知れないのですツて」  
「エツ、お母ア様の行衛が………」と前齣を聞きはづつた美佐子は我が事かど如聞

直す。

「エ、太郎のお母ア様が知れなくなつて了つたの」と、光人はどこまでも虚心である。美佐子はホツとして、

「ア、太郎さんですか」

「エ、然うなの！それでねエ、そのお山には梟の化けたお婆アさんが居るの。それが太郎のお母ア様を件れて行つて隠したのです」

「マア、可怖いこと」と、美佐子も對手にならぬわけには行かなかつた。

「なせ梟のお化が太郎さんのお母ア様を隠したのでせう？」

「それはねエ、其のお化のお婆アさんは、小兒の生膽を食べることが好きなんです。だから、お母ア様を隠すと、きつと孝行な太郎が探しに来るから、其時捕まへて生膽を取らうとしたのです」

「マア」

「けども、太郎は親孝行だからお山の神様が助けてやらうと思つて、一人のお老爺

「それから、どうしました」

「それからねエ、そのお婆アさんは、大へんやさしく親切らしくして『坊やさぞ困るだらう、わたしが教へて進げるから一しよにおいで』といつて、太郎の手を引いて行かうとしたのです。さうするとねエお母ア様、そのお婆アさんの手が、氷見たいに冷たかつたのです』と今度は還つて留守居の老婆の冷たい手を思ひ出して怖る、如く次の室の方を顧みた。

何處かで遠く竹笛が聞えて、日は赧々、照りながら、田舎の冬は『夢の國』のやうに寂しい。

## 〔二六〕

二人の曲者と引つ組んだま、断崖岸破と踏崩して吹雪荒む魔ヶ谿の、千仞の淵底へ、生死も知らず陥つた正司は、甚麼したか？

往昔から這の谿へ墜ちた者は、人と獸とを問はず、再び生きて登つて来たことがないと云傳へられてゐる。哀れむべし正司も亦、底に時立つ巖に碎かれ、皮裂け肉破れ、骨も筋も、微塵になつて、見るも無慘な最期を遂げた歟？

否す！

幾時経たか知れないが、正司は微かに犬の聲が耳に入つた。

そして、それが最初のうちは遠く遠く遙に聞ゆるやうに思はれたが、次第次第に

近く聞えて来て、遂には耳元で聞えた。しかも其れは愛犬のエスの聲であつた。

と、正司は不圖人心地がついて、ハツと四邊を見廻すと、先刻乙倉に囓着いたまゝ、谿へおちたエスが恰もわれを呼び活けるかのやうに盛んに吼わたり、ゐたので、『お、エスカ』と思はず叫んだ。エスは主人の甦つたのを見て、驚喜して身を摺つける。

『ム、貴様どうして助かつた？』

どうして助かつた？とエスの無事を訝る時、正司は忽ち自身の生きてゐる不思議さに想到した。

『ヤッ乃公も助かつた！』と急に身を起しかけたが容易に起てぬ。

氣が付いて見ると、二人の曲者が今猶犇と組着いたまゝである。自分は組まれたまゝ、二人の上へ折重なつて墜ちたので無事であつたが、二人はさらでも高所より墜ちた上、正司下敷きになつて押し打たれ、手足を挫き、胸骨を碎いて血へごを吐いて惨死んでゐる。

少し離れて乙倉が銃を握り糧食の荷を負ふた頭を粉碎し血に染みて倒れてゐる。四邊の積雪は鮮紅！

「呀」と、ばかり正司は左顧右眄で、そゝろに溜息を吐くのであつた。

エスは宛然嬉しさに、主に飛びつき身をすりつけて、その無事なるを喜ぶ態、犬でさへ主を思ふ真心は見ゆるのに、おのれ人として現在の主人に危害を加へんとした奴輩と、正司はしばし乙倉の死骸を睨みつけたが、心づいて漸く組着いてゐる二人の曲者等の死骸の手を引き放なし、さすがに蹠跟く足を踏みしめて立ち上がった。

雪は小歌もなく降つてゐる。

「ム、」と、唇を噛んでふり仰いだ正司の面は、眞に悽愴たるものであつた。

神ならぬ身とはいへ、あまりに豫期せぬ今日の出来事に、正司は何んと判断を下すべく、頭腦の裡は混乱した。

そも、甚麽いふ理由があつて自分を此の魔ヶ谿へ突落さうとしたのか？

甲斐澤といひ乙倉といひ、孰れも邸の書生である。恩はかけたが怨みを受ける覺えはない。

それが二人共謀して、加之多數の悪漢を語らひ、人跡論な魔ヶ谿に待伏せして……。どうも解らぬ、如何にも合點の行の事だ。

運好く自分が上に成つて、二人が下敷に成つたればこそ、不思議に生命も助かつたが、もし反對であつたなら……。

正司は轉た戦慄した。

〔二七〕

天の佑か神の助けか、生くまじきはすの命が助かり、微傷だに負はなかつた正司は如何に考へても甲斐澤と乙倉どが、何んの爲めに自分に危害を加へんと謀つたかといふ點に想像がつかぬ。

最初甲斐澤が背後から突落さうとした。そして其れに失敗するや、多勢を以て取籠めて柄物を揮つて撃ち倒さうとした。その隙に乙倉が銃を奮つて逃げかけたが、却てエスに襲はれて、谿へ墜入り自滅した。

それから、甲斐澤と今一人の曲者が、更に柄物を以て打たうとした。中にも一人の曲者は、拳銃を擬して狙撃せんと身構へて居た、残る二人は、左右から組着いたをとして互に揉み合ふうち、此の谿床へ陥つたのだ。

然ういへば麓で怪しい足跡を認めた時、甲斐澤等の様子が異つて居た。

斯う考へ來つて見ると、どうしても最初から自分を亡きものにしようと思つて居た。つた仕事に相違ない。が、自分を殺して彼等に何んの利益があるのであらう？

唯漠然と理由もなく、漫りに人命を絶たうとする——恐るべき殺人犯を敢てしやうとする、其處には何か大なる理由が無ければならぬ。が、其れが判らぬ。

「蹠蹠？」と、正司は腕を拱んだ、エスは主人の心を知るや知らずや、頻に吼えて身を摺りつけるので、

「お、」と、正司は片膝突いて、エスの頭へ手をかけて、

「エス、貴様よく無事だつたナ、そして、よく乃公を呼活かしてくれたナ」と、雪に濡れた愛犬の顔へ頬を當てた。エスは嬉しげにいよ／＼尾を揮る。

「可愛い犬だ、貴様は實に伶俐な犬だ、乃公の爲めには眞實の命の親だ」と、正司は感極まつて聲を曇らせたが「それは然うと、甲斐澤や他の奴等は甚麼しをつた

か？」と、遙に山上をふりさけ見たが數十丈の高さといひ、狂ふ吹雪に遮られて見れども見ぬ。

「恐らく彼奴等は、乃公を既に死んだものと思ひ極めて疾くに引揚げて了つたらうだが、どう思慮て見ても、甲斐澤や乙倉が、彼等自身の了間で乃公を殺さうとする

理がない、事によると何者にか頼まれた……。併し、乃公は誰からも怨を受け

るやうな覺えはないが……」  
思ひまどうて正司は又腕を拱むのであつたが、  
「否、こんな事を考へてゐる場合ではない。乃公は何様にかして此の谿から脱出

ければならん』と、自ら激勵し勇氣を出して『エス、貴様には禮を云ふぞ、若し貴様が呼活けてくれなかつたら、乃公はアノま、此谿底で、凍え死に死んで了ふところであつたらう。感謝するぞツ、さあ、エス、い、か貴様もこ、で奮發してくれ、何様なりともして崖上へ登つて、甲斐澤奴を捕つて押へんければ成らんだ。エス！奮發しろツ』と、力足を踏み、深呼吸を試み、満心の勇氣を揮ひ起して乙倉の死骸の手から銃を奪回し物凄じく叫び狂ふ吹雪を衝いて、山上に登る路を尋ねべく、彼方此方と走せ廻る。エスも主におくれじと、勇ましく身顛ひして、雪を蹴立てつ跡につゝいた。

〔二八〕

流石軍隊の生活に慣れ、曩には皇軍に従うて、征獨の戦役にも参加し、目覺しき殊勳を樹て、凱旋したほどの壯漢で、身も心も鐵石の如き正司は、狂ふ吹雪も岩石

絶所も、更に厭はず、勇を鼓して谿の裡を彼方へ馳り、此方へ駆け、頻りに登るべき路を求むるのであつたが、其の苦心もうたかたの、あはれ全く路絶れて、再び登るべき因もなかつた。

方數丁に過ぎぬけれど、四面ことごとく屏風を圍らせる如き大巖石で、加之、岩の面は鏡のごとく滑かなるのみならず、其の質の堅きこと鐵も物かは！打てども破れず、叩けども碎けず、足踏み掛る虚隙も無ければ、命と頼む萬萬の、手繰るべき手がかりも無い、曾て山上で酌を聞いて、溪流のそれかどのみ想像つてゐた水の音は、今見れば高サ十餘丈り、幅三四間もあるべきか、唯一條の飛泉であつて、今は全く凍り果て、恰も水晶簾を懸けたやうに化つて居る。源は岩間を傳ふ幾千條の山清水が、自然集つて流れ落るのであつた。且其下流は尺にも満たぬ岩間をくゞつて、再び岩に浸み入るか、さては八萬奈落に落ちるか、行方も知らず果てもない。縦然凍り果てずとも身、魚ならずば怎で此の流に從つて脱出得やうぞ。仰げば屹たる百丈の斷崖。身、禽ならずは怎でか彼の險を越わやう！



古來、魔所といひつたへて、人の怖れたのも道理である。降り積む雪に埋もれたれど、恐らく其の下には、人や獸の白骨が藏まれて居るでもあらう。と、さうも勇氣の氷室正司も、そゝろに後邊を顧みると、そこには生々しき血潮に染れた三人が半ば雪に埋もれんとしつゝも、尙ほ其の醜き死骸を露出してゐる。

「嗚呼、もう罷了！」

正司は爰に至つて力も折れ、氣も挫けて、おもはずヨロ／＼と踰限いたが纒かに拿てる銃に支へて倒れざるを得たのみであつた。

「嗚呼、何うしても登ることは出来んのか？ 登ることが出来んとすれば、永劫此處を出ることが出来ん、その位なら、なまじ蘇生せぬ方が優であつた」と、正司は悲痛な聲で叫んで、天を仰いで歎息した。

「エス、もう駄目だ、人と畜生とは異つても、乃公と貴様は同じ運命をもつて生れて來たのだ。エス、もう貴様も斷念めろ。乃公も貴様も此の谿底で一緒に死ぬのだ」云ひ了つて銃を捨て、雪中に横乎と坐した。

が、エスは主の言葉を解せぬか猶も四邊を駆け廻つて、狂氣でもしたかのやう、獨り溪間を狂つてゐたが、乍ち彼の飛泉の下に足を止めて、しきりに其處邊嗅立つつ注意深く何者かを物色するうち急に一聲高く吠ね、驀地に正司の身邊へ駆け來て、行きつ、戻りつ且つ吠えた。

併し、正司は起たうともせぬ。或は最早起つべき氣力も盡きたのかも知れぬ。がエスは猶吠えやまず、果は正司の上衣の裾を咬へて、此方へ來よと云はぬばかりに懸命に曳くのであつた。

「エス、貴様何を爲る？」と叱つたが、正司も餘りの不思議さにやをら銃を杖に立上つて、曳かるるまゝに飛泉の下に來て見たが、別段變ることもない。或は此の凍つた飛泉を力にして攀登れどもいふ意かど、覺えず獨り苦笑したが、溺るゝ者は薬にも縋る、試みに觸つて見ると、鐵條の如く堅い、けれども其の冷たさは骨に徹して一分時觸つて居られぬ。のみならず、高サは十丈以上もあらう。よし冷たさは忍ぶども、斯の滑らかな氷柱を力に甚麼して上まで登れやう。途中で折れるか手

が這つて、墜ちれば猶是死を脱がれぬ。  
「嗚呼」とばかり、正司は其處を立去らうとする時、何物が目に入つたか、急に驚異の目を睜つて、

「呀ッ」

と、愕きの聲を揚げた。

見よ。水晶簾の蔭に方つて思ひも設けぬ洞穴があるではないか！

〔二一九〕

『氷室伯爵閣下萬歳』と、諸聲に呼ぶ聲の裡に、徐々と甲板から棧橋へ降り立つた眉目清秀の紳士は、幾百人の出迎への紳士淑女に對つて、右手に帽子を高く舉げつゝ、微笑を含んで會釋したが、その眼は斷えず何者をか求むる如く、敏捷に且つ注意深く働いたのであつた。而も遂に何者をも認め得ずして、失望と不安に瞳が震へた。

それは誰？言ふ迄もなく今般米國より歸朝して、今横濱 波止場へ着いたばかりの伯爵氷室光正である。

是人、人と爲り濃厚篤實、加ふるに頭腦明哲、天性科學に興味を有し、夙に帝國大學に學んで理學士の稱號を受け、同窓間に於ける一異彩として、その該博なる學識と緻密なる思索とは屢々先輩をして驚嘆せしめるのであつた。數年以前自家の持山より炭鑛を發見し、自ら氷室炭鑛と命名け、巨萬の資を投じて發掘を始めたが豫想ふに増した大炭鑛で僅々三四年の間に吾邦屈指の炭鑛と許され、はじめに投じた資金は忽ちのうちに回收し爾來益々大利を收め、伯爵家の寶庫とまで謂はるゝに至つた。すでに去年米國に渡つたのも、炭鑛事業研究の爲めであつたのである。

伯爵の祖父は尾州藩の輕輩より身を起して老臣に擧げられ、其子即ち光正の父の代に至つては家門愈々富榮えたが、會々明治維新の風雲に乗じ、一躍して廟堂に立ち、樞要の職に當り、後に華族に列せられたけれど、感ずる所ありと冠を掛け、野に下り、長子光正に世を譲つて安らかに身を終つた。

今、光正が歸朝に際して、朝野の紳士が雲のごとく集まり、心より其安寧を欣悦ぶのを見ても、交際場裡に於ける伯の徳望が忍ばれるではないかと、人々の口より口に傳へられた。

光正は頗る謹嚴なる態度を以て出迎への人々に、一々厚く禮を述べて、しばらくは寸暇も得ぬ。伯の傍には紋服正しく家令駒田堅策が引ッ添ふて、主の足らざるを補ふべく、その及ばざるを怕る、やう鞠躬如として來會者を待つのであつた。

彼方此方に設けられた受附けには數名の家扶、書生等が叩頭に忙殺されて居る。その中には數日前に、魔ヶ谿で主人光正伯の令弟たる正司を謀つて深谿の底に陥れた、彼の甲斐澤剛造の何食はぬ顔も見わた。

斯ばかり忙しい其中で、光正の眼の何者をか物色してゐたことは前にも述べた通りで、遂に求め得ず、失望と不安の色をあらはしたのであつたが、味へかねてか、幾度となく顧みて、駒田家令何事かを問はんとするもの、如くであつたけれど、萬里の波濤は汽船に蹴破ても、還つて着陸後押寄る出迎への人の波浪に圍まれつ

漂はされつ、寄るかと思へば隔てられて、更に問ふべき機會を得ず、思はず幾時かを經過したのである。

〔三三〇〕

何式とかいふ歐風の粹を極めて善美をつくした一室に、安樂椅子に寄り卓子に凭つて、終日の疲勞を休めつ、も何事かを思ひ耽つて居るのは伯爵氷室光正である。横濱へつくなり出迎への人々に應接し、それがすむと直に帝國ホテルの招宴に臨み、夜に入つて今辛而邸に歸つたのであつた。

ト、廊下に通ずる關をノックするものがあつたので、伯爵は期待するところあるかの如く眼を輝かしつゝ、

『お入りなさい』と、之に應へた。

『御免を……』と、關を排けて室に入つたのは伯が期待した其人ではなくて、家令

駒田堅策であつた。

光正は、それを瞥ると、や、失望らしい色をも見せたが、詞では快濶に、  
「オ、駒田君か」と、見迎へた。温厚なる伯は家扶、書生の末にいたるまで、常に決して呼捨てにせぬ習ひなので、

「さ、此方へ来てお掛けなさい、今日は嘸疲勞れたでせう」と、自ら起つて椅子を與へる。

「恐れ入ります、恐れ入ります」と、駒田はいとぞ恐縮して、幾度か低頭したが、猶、椅子には腰をおろさず、悄然と直立て、

「御前、先づ以て、御無事に御歸邸遊ばしましてお目出度う存じます。横濱ではアノ通りの混雑、しみじみとお悦びを申し上げます暇もございませず、それより直ぐにホテルへお越し遊ばしましたので、唯今まで誠に失禮を致して居りました。経過て見ますれば早いもの、如には存じられますが、半歳の間拜眉で得ませず、じじ、實にお可憐しう存じ上げます」と、駒田家令は、喜び極まつて涙を催せし、

詞のうちに聲調が曇つた。

「難有う、わけて留守中は何かとお世話でしたらう。併し君が居てくれるので邸の方も、事業の方もわたしは少しも心配せずに、後顧のうれひなく、安心して旅行がつづけられました、いづれゆつくりと御報告も聞き、又慰勞もしたいと思つて居ます。何せよ、おかげで心配なく寛々と視察を遂げたので、非常に得るところがありました。其の點についても、わたしは深く君に感謝します」と、伯爵の態度は飽迄懇慫であつた。たとへ何れほどの勤勞があらうとも、主として斯ばかりの懇詞をかけるとは、堅策にとつては光榮とよりはむしろ、恐れ多い次第。甚だ過分のやうではあるが、これを以て見るも、いかに駒田堅策が忠勤無比で、伯の信頼の厚いかを察し得られやう！

「恐れ入ります。恐れ入ります」と、ばかり駒田はいよく恐縮し、ますく謙遜の態度で、殆ど顔も得あげぬのであつた。

伯は、まづ駒田を勞ふて、さて彼れの口から何かを聞くべく待つたのであるが、

彼れは其のまゝ、口を嚙み、黙々としてうなだれてゐるばかり、はてしがないので怵えかねて、

「駒田君！奥は甚麽しました？そして光人も見わんやうですが……」

思へば半歳の間、絶つて相見ぬ愛妻と愛子、それが横濱でも顔を見せず、ホテルから歸つても、今だに其の姿を見せぬ。伯の胸は騒がすには居られない。

〔三三〕

久々の歸朝といふに、美佐子夫人も光人も、影も形も見せぬので何とやら不安を感じて、胸うち騒ぐを禁め敢へず、光正は半身を卓子へ乗出すやうにして、駒田家令の返答を待つのであつたが、彼れは尙ほ默然として、左右の應へもせぬのみか唯見れば甚事ぞ、彼れは潜々として涙を垂れてゐる。

「駒田君、どうしたのか？」伯爵は叫ぶやうに問ひかけて、弾かれた如、我れ知ら

ず椅子を放れて立上つた。それと殆ど同時に、

「御前、御免下さいましッ」とたゞ一言、その場に控乎と坐すよと見わたが、左手にいそがわしく襟を寛げた駒田堅策の、右手には何時か明晃々たる七首が抜き持たれて、あわや、其の腹へ突き立てられやうとされるのであつた。

伯爵は餘りの意外に呆れまどひつゝも、

「待てッ」と一聲、躍りかかつて、矢庭に堅策の腕を押へ、

「待て、先ア待て」と制し止めるのであつた。けれども、堅策は懸命に伯爵の手を振放して再び腹を切らうとする。

「待て、待てといふたら待たんかッ」と、伯爵も懸命で、やゝしばし揉み合つたが辛うじて其の七首を抜き取つた伯爵は、喘々と息を切つて、

「こゝ、駒田。な、なにを君つまらんことをするの」と、たしなめて件んの刃物を卓子の上へおくと同時に、自分も倒れるやうに椅子に身をおとして、猶も息をはずましてゐる。

「御前、面目次第もございません」

堅策は斯ういつて、緑、紅色々の花模様麗はしき戎緞に坐つたまま、両手を支いて頭を下げた。其の肩には喘ました息を刻んで居る。

「一體どうしたといふ事か？」

「ハイ」

「君のやうな分別のある男が、何故自殺など、そ、そんな野蠻極まることを爲さうとされるのか？」

「申譯がございません」と堅策は面も得上げぬ。

「申譯がない？何が申譯がないといはれるのです」

「……………」

「縦然どればこのことがあらうとも、自殺とまで思ひつめるとは駒田君、君のやうでもないではないか！無言つてゐては判らん、わたしに事情を話して下さい」

「左、左様にお優し、仰せられまするほど、堅策ますく、面目、失ひます」

「面目、失ふ？ま、ま、言つてごらん下さい」

「ハイ、今更なんと申譯もございませんが、手前、申譯のない失策をいたしましたてでございます」

「失策といふと？」

「ハイ、じ、實に申し上げまするに忍びませんことで、駒田堅策一生の失策でございます。お詫びを申し上げますにも詞がございませんので、此際、手前が御前様への御謝罪の方法は、死、撰ぶより他は断じて途がないのでございます」

「まア待ち玉へ、然う君のやうに興奮しては不可、どうも君の詞はわたしにはよく解らん。モツと明白に話して下さい」

「ハイ」と堅策は沈乎となつたが「息ある中はお目に掛けまいとは存じましたが、さほどまでに仰せ下さります上は、致し方がございません。デハこれに、かねて今日あるを期しまして、認め置きました手前の遺書がございますので、何卒御一讀が願ひなのでございます」と、亂れた襟の間を探つて、取出した一封の書

簡を怖る怖る光正の前に提供した。

(三三)

夫人と嗣子との安否を問へば、其れに對する答詞は無くて、陳謝るにさへ詞もなし、急に白刃をきらめかして自ら殺さんとする堅策を、光正は纒に制めて、怖る怖る提供した遺書を、不安に振ふ手先もてやをら繰扱げたが、讀みもて行くうち次第次第に眉をひそめ、顔色やうやく蒼白めて、我れにもあらず其の書面を、取り落すまでに愕いたが、轟と諸腕を腕に拱んで、眼を閉ち唇を結び、默然として死灰の如く、深き思ひに沈むのであつた。

堅策はと見れば、彼れも亦深く黙して、兩手を下に支いたま、頭をも擡げぬが、額越しに眼を放つて、光正の様子を覗ふのであつた。

彼れ言はず、此れ語らず、室内はたゞ森として、暖爐の上の置時計が、時を刻む

チクタクのひゞきのみ、徒らに耳立つた。

や、あつて、光正は、その高鳴るらん胸に拱んだ腕を解いて、

「駒田君、取んだ事が出来ましたね」と、徐かに、更に激る態もなく、發した、聲調は道に徹かに顛へて、騒ぎ悸く我が心を、強く自ら制する苦痛著しく、眞に悲愴聞くに堪へざるものであつた。

「ハイ、じ、じ、實に何んと申上げて宜しいか、堅策奴は其の詞を辨へませぬ。これ皆手前が不行届きの罪で、お詫はたゞ此腹を搔ッ割いて、血、血、血潮の洗禮に由つて、免罪されるばかりでございます」と、再び卓上の七首を取らうとするのを、光正は咄嗟と止めて、

「待ち玉へ、駒田君、さう君のやうに早計つては不可、まア氣を鎮め玉へ」と、七首を堅策の手の達かぬ所に移置て、

「併し、實に意外です。まつたく夢のやうです、否、夢にも斯うした不祥の事が、わが氷室家に起らうとは思はれませんでした。あれほど貞淑な美佐子が……、嗚呼、

あれほど貞淑な美佐子が……』と、堪へずや光正は頭を抱く。

「ま、まつたく夢も覺わませんことでございます。あれほどまで貞淑にわたらせられました令夫人が、お人もあらうに御令弟の正司様と、道ならぬ不義密通をおはたらき遊ばしまして、われ々の目をお晦し遊ばされましたばかりか、いよいよ御前の御歸朝の日も通りまして、御安着遊ばさうと申す其間に、夜に紛れてお二人とも、手に手を取つて、突前姿をお隠し遊ばすとは、じ、じ、實に言語道斷な被成方でございます。今日の場合、最早おつ、み申上げるわけには相成りませんで、たゞ有りのまゝに申上げますが、實は不圖手前が令夫人と正司様とのお間柄を發見いたしましたので、これは氷室伯爵家に取つて、由々敷き大事と心得ましたが、何を申すも令夫人と御令弟でございます。メツタな事は申上げられませんので、折を見てそれとなく御諫言も申上げましたのでございますが、正司様は非常の御立腹で、手前を打ち打擲まで遊ばしましたのでございます」と、涙を拭く。

光正は、自制し且自制して、僅かに倒れざるを得ぬのみである。

〔三三三〕

堅策は猶も語をつゞけて、

「何を申すも正司様は御存知の御氣象でゐらせられます。一旦斯うと思ひきはめられましたからには、何ん人が如何様に申しませうとも、却々お心をおひるがへし、には相成りません。いや、却て反抗的に、手前へ對してコレ見よがしの被成方を遊ばすので、荒立てましては所謂暗所の耻を明所へ持出しますやうな譯と心得まして、據る無く假りに手前が勘違へを仕りましたこと、いたしまして、甘むじて御折檻を受けましたが、もとより其のまゝにいたしては居られませんので唯今より一週間あまり前、たしか九日の日と記憶仕ります、幸ひお傍に人の無い折を見計らひまして、令夫人に懇々と御諫言を申上げましたのでございます」



「ム、そして奥は何んど云つた？、美佐子は何んど答へたか？」光正もや、急いでゐる。

「それが御前様、お情れ遊ばして御先非御後悔ともござりますれば、また致し方もございませうが、令夫人は、たゞ／＼知らぬ覺えがないどのお詞ばかりで、更に御改悟の色も見えませず、果ては手前の面上へ、在合ふ器物をお投打ちを遊ばしますといふ爲體で……」

「何ッ奥が君に投打ちを……？」嗚呼アノ慎しやかな美佐子にして然ばかり荒けな舉動ひを敢てするとは、いかに戀に狂へばとてさても何處まで紊れに亂れたのであらう？と、光正は呆れ果てたのである。

「いね、そればかりではございませぬ。手前がお面を犯してきびしくお諫め申上げましたので、一つは御辯解のお詞にお窮し遊ばしました爲めもございませうが、家來の分際として、主たるものに對つて無態の言ひが、りをするとはいふ可成り千萬とございまして、即座に手前を御放逐の御沙汰でございました」

「き、君を、ほ、放逐すると……？」

「ハイ、左様に仰せでございましたが、手前も一生懸命の場合、さほどまでにシラをお切り遊ばしまするなればお目にかける品がございまして申上げまして、圖らず手に入りました御密書——それは正司様より令夫人への御書簡で——それをお目の前へさしつけまして、御先非御改悛をお迫り申上げましたところ、さすが剛情の令夫人にも、これにはハタとお困り遊ばしまして、はじめて御自分が悪かつたと御懺悔遊ばし、今後をつゝしむゆる、此事は内聞にして呉れよどのお頼みでございましたので、ともかくも此場合、御前様御歸朝にもお間の無い事でございますゆゑ、御前様に甚だ相濟まぬ儀とは心得ましたが、斯様な事が世上へ漏れましては御家名の汚れと存じまして、令夫人お望みに任せ、右の密書は其場に於て火中いたしましたのでございます」

「何、密書を火中したと？」

「ハイ、ところが御前様、それは證據を湮滅遊ばす爲めで、其場は宛然御改悛の如

くお見せかけ遊ばしながら、夜中正司様と御逐電を遊ばしたのでございます』  
 『そ、そ、そして光人は、み、光人は？』と、伯は舌さへ硬ばる思ひである。  
 『ハ、ハ、若様には其節御同道遊ばしたものと見なしまして、同時にお行方不明にお  
 成り遊ばしましたのでございます。誠にハヤ、返す返すも申譯のない大失態、  
 手前として一命を抛ちますより他に途のございませぬ事情、御賢察のほど願は  
 しう存じます』と、誠にやかに述べるのであつた。  
 寔に毒舌の怖るべきは、今、彼れ堅策が便々たる其の腹に擬せし其の白刃よりも  
 怖ろしい。

【三四】

證據となるべき艶書を焼棄て、直諫め、駒田の面上に投打ちをしたといふ美佐子  
 の所業は、到底名譽ある伯爵家の令夫人ともあるべき貴女、爲すべきところでない。

果して美佐子はそんなはしたない真似をしたであらうか？

恪勤忠誠の聞に高い駒田家令が涙を注いで語るのであるから偽りでない事は明白  
 だ。が、さりとては餘りの亂行である。彼女を伯爵夫人として容る、時、反對を稱  
 へた親戚知己は、當時何んといつて之れを止めた？曰く身分ちがひ、曰く賤業婦、  
 曰く無教育、曰く何、曰く何、それはそれは血の出るほど悪ざまに罵つた。  
 それを振切つて伯爵家に迎へた時は、今に見よ光正は面皮を缺かう。氷室家の家  
 庭は冬の枯野のやうに紊亂れやう。と、當初反對した人々は、鞆の目鷹の目で視豎  
 つて居た。

然るに美佐子は結婚以來、身ど省みて遜り、爾來九年何一つ過失もなく、自ら修  
 め、獨り慎み、最初誹つた人々も、今は心から敬服するまでに、稀に見る貞淑の貴  
 婦人よど令名噴々たるに至つた。而うして光正は先見の明ありと稱へられ、伯爵家  
 の家庭は春の海のやうに穏かで洋々たるものであつた。是皆美佐子が婦徳の賜物と  
 いはねばならぬ。その美佐子が如何に戀路の暗に迷へばとて、それはごまでも變

れば變るもの歟。それとも、これまでの貞淑は装うて居たのであつたらう歟。猶且はじめから莫連女であつたらう乎。それか、これかと光正は、千々に思ひ惑はざるを得なかつたのであつた。

深山の岩角をその鋭き爪に掴むで、將に羽搏たんとする翼を姑く歛めて、小禽を狙ふ巨鷲の眼の如き、爛々たる眼光を前額越しに走らせつ、伯の一舉一動を、見おとすまじど如、瞬もせず見成つて居た堅策は、伯の眉間にあらはる、悲痛煩悶の色を、明かに認め得た。而して物凄しい微笑を、其頬に泛めたが、それは刹那で、直ぐにハンカチで面を掩うて、頬に涕を吸るのであつた。

『そして、奥は光人を伴れて去つたのか』と、やゝあつて光正は問ふ。

『ハイ、多分左様と存じられます。御諫言は申し上げましたが、たとへ快く御承引はございませんでも、正可に其の夜のうちに、若様までお伴ひ遊ばしまして、御逃亡遊ばさうとは此の堅策も豫期いたしませんことで、翌朝はじめて心づきまして驚いたのでございしますが、なまじ保護願ひなど出しましては、自然此の事が世間

に漏れ、延いては御家名にもか、はりまする事と心得まして、今だに秘密に付してございませすやうな義で……お立退きは極めて巧妙に行はれましたやうで、邸内の者誰一人心づきませんのでございしましたが、こゝに不思議は、彼の乙倉再吉と申す書生が、其の前後に於て姿を晦ましたことで恐らく令夫人並に正司様のお手先となつて働きましたものかの如に存じられます』と堅策の舌は澁みもなく滑らかに動く。

『嗚呼、何んといふ不心得者か』と、光正は拳を握つたが『心底の腐つた奥や正司は兎も角も、彼等に誘はれた光人は甚麼したか駒田君、わたしの胸中を察して下る』と、ハラ／＼と落涙した。

〔三五〕

『駒田君、どうしたものであらうなア?』

光正は實に思案に餘つたのである。

「正司と美佐が不倫の醜行は實に憎んでも餘りあるが、なまなか事を荒立て、は家名にかゝはることでもあり……」と、伯は再び頭を抱へた。

「仰せでございます。併し打すて、も措かれませぬ儀で、十分に秘密を守りまして爾來お行方を搜索いたしては居りますが、今以て手が、りとてもございませぬ。其うち御前様には御歸朝遊ばしたので手前全くおわびの詞を存じませぬ、斯様な尾陋のふるまひに及びましたやうな次第で、たゞただお詫を申上げるばかりでございませぬ。何卒、手前を御存分に遊ばしまして、不行届きの罪を……」

「駒田君、駒田君、何を云ふのか。君を存分にするのせぬのと、光正はそれほどまでに常識を失つては居らん」

「ハ、ハ、恐入ります」

「だが駒田君、察してくれ玉へ、わたしの腦裡は混乱してゐる。それほど不貞な奥に猶未未練があるかと、君は笑ふかも知れんけれど、彼女を氷室家へ迎へる時

のことを思ふと、今日かくのごときことがあつては、わたしの面目が立たん、奥の不埒は恕し難いけれど是非探ね出して訓戒を加へた上、今一度邸へ呼び戻したいと思ふ」

「御寛大の思召し恐入りましたでございませぬ」

「駒田君、どうぞ笑つてくれ玉へ」

「たゞ々々お察し申上げます」と堅策は涕うち去む。

やゝあつて光正は深い〜歎息を吐いて。

「駒田君！」と呼びかけた。

「ハイ」と、堅策は顔を擡げて膝をすゝめるのを、

「ま、掛け玉へ、然うし居つては話が出来ませぬ」

「ハイ、では御免を蒙りまして」と堅策は怖づ〜と立上つて卓子をやら、離れつ、

慎まし〜椅子に腰をおろした。

「駒田君、君の精神は能く解つてゐますから、再び今のやうな事は爲ないでくれ玉

へ却てさうした事から、奥と正司との干係が同族の者に知れ、若し世間へ漏れるやうなことがあつては、いよく胡廬の種になります」

「誠に、赤面の外はございません」と、堅策は額の冷汗を拭く。

「いや、決して君を責めるのではない、いかに忠實な君といへどもまさかに奥は正司に然うした事があらうと豫期して監視するまでには行届くまい。それは決して責めません。此上は、何うともして彼等をたづね出して、奥の丁見を訊した上、セメテ光人丈は取戻す方法を講じたいと思ふ……」

「……………」

「正司は亡くなられたお父様が非常にお愛し遊ばした、わたしに取つては天にも地にも唯一人の愛弟です。罪は憎いが其の人は憎めぬ。あ、わたしは無事で歸朝れた自分を怨みます」と、光正は浩歎した。何といふ美しい心であらう。何といふ優しい心であらう！

「申し上げべき詞もございません」と、堅策は聲を震はせていつたが「では今晚は

これで失禮を仕ります。明朝早速何かの手筈をどのへまして、十分秘密に搜索を致すこと、仕ります」

「では君もお休みなさい、わたしも休みませう。そして、返すくも輕擧を爲さんやうに」と、七首を手に渡せば、堅策は恐懼しつゝ、受け收めて、

「難有う存じます」と、恭しく長揖して、室を去らんとした時、彼れは冷やかに笑みを漏らしつゝ、舌を吐いた。

が、それは伯爵には見得なかつた。

ト、闔の外に、急はしく人の立去る氣配がした。堅策はハツと色を作して、衝と闔を排けて出たが、電燈の光達き敢へぬ廊下に逃ぐるが如く去る人の後姿を認めたそれは門番の佐兵衛らしかつた。

【三六】

岩間を傳ふ苔清水の落ちて流れて集つて、一條の飛泉となつたのが、寒さに凍つて、水晶簾と化したその陰に、横様に開いた洞穴を發見し、正司は、おもはず「呀ッ」と驚きの聲を揚げて、目を見張つたが、その間にエスは幕地に飛込んで、暗中に姿を没した。

「エス、く」と、正司はしばしば呼んで見た、とエスの吠ゆる聲がした。その聲は洞にひびいて物凄く訝した。

正司は耳を敬てつ、しばらく様子をかがつかつて、高く口笛を吹き鳴らすと、それに應へるやう、復エスの吠ゆる聲がして、やがて舊の洞口へ駆けもどつて正司の周圍を駆けまはつては頻りに吼える。

「エス、どうした？」と、正司は犬を引寄せて一應その身体を調べて見たが何んの異なる條もない。

「好矣、乃公も入つて見やう」と正司は猛然として身を起し、何の躊躇するところもなく、暗き洞穴の裡へ進み入つた。

エスも主に引ッ添うて再び洞中に駆け入つた。

正司は十分に注意を加へつ、一步一步漸く深く進み入る。

約一丁ばかりの間は一直線を爲して且至極平坦である。高さは一丈あまり、横間は十間位と覺しく歩むに何んのさわりもなく、顧みれば、日やうやく暮れんとして蒼蒼たる暮色を洞口に望み得た。

それから少し右に曲つて、洞内もや、狭く、最早洞口は見えなくなつて、暗さは漸く増すのであつた。

「ハテナ？」

正司は急に歩を留めて考へて見た。

「思つたよりは大きな洞穴だが、これが何處までつゝいてゐるか更に方角がつかん」と、やをら其處に踞蹲つてポケットを探り、マッチを取り出して巻煙草に火をうつしつゝ、その火の影で更に四邊を見廻した。が、火は忽ち盡きて、咬へた煙草の火が、妖怪の目でも光るかのやうに残るばかり、あとは又眞つ暗になつて了つた

正司は再びマッチを摺らうとしたが急に中止して、

「さて、マッチの火位では間にあはん……さうだ、乙倉の奴の荷物の中には、携帯電燈もあつた筈だ。よしッ、一旦引き返して、十分に準備をした上、ともかくも此の洞穴を進んで見やう。手を束ねて死を待つよりは、その方が遙に上策だ。死ぬも生きるも皆運命だ！今更何を躊躇し、何を怖れる事があらう！、進め、進め、行けるところまで行ッて見ろッ」と自ら問ひ自ら答へ、勃如と起つて巻煙草の吸ひ殻をハタと抛つと、足下に火花が勇ましく潑と散る。

〔三七〕

進得るだけ進んで、試やう！と心を決した氷室正司は、また洞外に取つて返した日は將に暮れんとして、さらでも薄暗い窟底は蒼然たる暮色を込めて、狂ふ吹雪は颯々たる音を立て、物凄じきけしきである。

願れば三人の死骸は半ば雪に埋もれて居る。とエスは乙倉の死骸の傍で何事かを主に注意を促すやうに頻に吠える。正司は不圖心づいて、

「然うか、乙倉は糧食を脊負ッてゐるのだツたな」

ツカ／＼と立寄つて、死骸の脊からズツクの袋を取つた。中には携帯電燈や乾電池や、鐘詰が充満入つてゐる。大の男が三人で四、五日山籠りをするつもりで用意して来た糧食であるから従つて嵩も高い。

「嗚呼全く天の與へた、天幕をもつてゐた甲斐澤が落ちずに、糧食をもつてゐる乙倉が落ちたので先づ當分は飢えずに済む。エス、きさまナカ／＼味をやるな」と正司ははじめて微笑を漏らしたのであつたが、

「さ、エス！きさまも背負ふのだぞ。乃公も半分手傳ふからな」と、まづ荷物を洞内へ運び入れ、三人の死骸からマッチを悉く取り集めて、ポケットへ納め、どつかりと洞内に胡坐をかいて、

「オ、存外こりやア住み心地がよさ、うだ兎に角今夜は此處で露營だ、うむ、い、

事がある一と、曩に狩得た、獲物の乙倉の腰につけてあつたのを取つて来て、  
 「エス、きさまにも御馳走をするぞ、まて〜、生ちやアいかん」と、積る雪を掃  
 き除けて山上から散り込んでまだ朽ちやらぬ去年の落葉を掻き起して焚火の用意を  
 と、のへ、獲物の兎の料理にかゝつた。  
 生れ得て豪膽な上、此場合殆ど生死の上に超越した正司は、もう屈託らしい顔も  
 せぬ。

さうして手際よく兎の肉を割いて、掻き寄せた落葉を焚いて且焼き且食ひつゝ、  
 「さうだ、ブランドーがあつた筈だが……」と、肩に掛けてゐた水筒を振つて見て  
 「うむ、在るぞ〜」と、ニッコリして「金属製のおかげで破壊れんかつたのは何  
 よりだ。併し補充がつかんから膽斗は飲めんぞ」獨り語ちつゝ、甘さうに味はふ。  
 エスも主の傍にうづくまつて分配してもらつた肉を食べてゐる。

「エス、きさまにも一ぱい與らうか、ハ、ハ、」と、うち笑ひつゝ、快く食事を終へて  
 無盡蔵な落葉を集めつゝ、焚火に暖を取りながら、荷拵へやら何やかや、思はず時を  
 遷したのであつたが、幸ひにして時計さへ無事であつたので、這の深谿の底に在つ  
 ても、時刻を知るの便宜を失はず、

「オ、最早九時か、併し、これで全部準備も出来た。明日からは洞穴の探險だ、  
 鬼が出るか蛇が出るか判らんぞ、まア十分に熟眠つて英氣を養つておかんければ  
 ならん。エス、今夜は宵寝としようかな。それにしても夜具には困つたな」と、  
 考へたが「イヤ、いい事がある。ドレ〜つ追刺と出掛けやう」と、復た洞外へ立  
 出で、雪明りに三人の死骸を尋ね、外套や上衣を剝取つて来て、焚火を踏消し其  
 上へ擴げると雪に濡れて居るので蒸すやうに湯氣が立つ、その上へ伸々と横たはつ  
 正司は、

「これで可い。エス、きさまも寝ろ」と、荷物を引寄せ枕にしたが、ブランドーの  
 微薫は睡魔を誘うて、うつら〜と眠りに入つた。

エスは注意深く四邊を嗅廻つてゐたが、これも主の身に我が身を寄せかけるやう  
 にして、丸くなつて眠るのであつた。



〔三八〕

地位も名譽も財産も何物をも犠牲にしても、たゞ一人の美佐子を得んとして、親戚、知己の反對を排し、美事に戀の勝利者となつて、同棲九年、光人といふ愛の結晶物まで儲けた、その最愛の妻を失つた光正伯は、事實戀の蛻であつた。

加之、天地間に掛替へのない、肉身の實弟正司が不義の相手と聞いては、腸を千断れるばかり、悲痛、憤恨、ありとある感情を絞る涙の色の、紅ならぬを不思議と爲る！

況して掌の中の珠玉と愛でた光人は二人の不義者に誘拐て行かれ行方を尋ねべき因もない。それは其筋の手を借りれば、比較的早く判明るであらうけれど、家名を思ひ、意地を立てれば、何處までも表沙汰にはされぬ。僅かに駒田の手によつて、秘密の中に尋ねるのであるから、容易に知れやう筈もない。それを思ひこれをおも

と、光正は居ても起つても居られないのである。

歸邸後既に數日を過ぎながら、駒田家令の報告は依然として「今以て手が、りがございませぬ」とばかりで、日々同じ詞をくり返すに過ぎぬ。光正の心は其都度苛立たしさを増して、歸朝を祝しつ訪れる同族、知己にも、所勞と稱して面會を謝絶し、ひとり了然と居間に籠つて、或る時は瘋狂人の如く室内を駈廻り、或る時はまた我れと我が髪をかきしり、食事も進まぬば安眠も能ない。随つて面憔悴れが目に見える。

けふも駒田堅策は打惰れた態で怖づくど光正の居室に伺候して宛然々々憂慮に堪へぬやうに、

「御前、實に拙者も困却を仕りました。今だに耳よりの報告がございませぬ。斯様に申せば或はお叱りを蒙るかも知れませぬが、令夫人や正司様は、たとへ何のやうに苦勞を遊ばしませうとも、失禮ながらソレは自業自得であらせられますが、何んにも御存じのないおいとけなな若様が、如何様に御苦勞を遊ばされます

るかと考へますると……拙者……拙者……實に胸先を抉られますやうに存じます  
 『と聲をふるはし眼を屢叩いて、いかにも悲痛の態を示すのであつた。  
 『お、駒田君、まだ居所が知れんのか。あ、』と光正は深刻なる歎息を漏らして濁  
 つた眼を俯せた。

堅策は例の前額越に、上眼づかひをして窃ツと光正の顔色を伺つたが、  
 『併し、御苦勞を遊ばすと申しましても、何せよお二夕方御出奔の際、莫大なる金  
 子を御拐帶遊ばされたのでございますで、さし當り御衣食にお窮りのやうなこと  
 は万々ございますまいが、令夫人にいたしましたしても、正司様にいたしましたも、  
 謂は、お一方は御女性の淺慮、又正司様には、肉親の甥御様とは申しながら戀  
 慕の暗にお迷ひ遊ばしましたお心からは、光人様は取りも直さず戀、仇とも申す  
 べき御前様のお種……兎角人間は感情の動物と申しますで、恐らくお可愛いと  
 は思召しにくうございませう歟、随つて何かにつけて、強面くお當りなされます  
 る事であらうと存じます、と實に若様がお悼はしう存じられます』と、狡らう

な眼で、復光正の面を偷見た。

光正は握りしめた拳を微かに震はしつ、齒をくひしばつて自制してゐるらしいが  
 さらでも蒼白た顔は愈々蒼くなつて、顚顚の邊の太い青筋がビクビクと蠢く。

堅策は夫れを見すまして、如何さま今心着いたやう。

『オツ、御前、大層お顔の色がお悪うございますが……イヤ、御道理の儀で……』  
 と吐息を叩いて左様な折には御酒をめしあがつては如何でございますか、酒は憂  
 ひの玉箒とか申しますで、一つお過ごし遊ばしては甚麼でござりますか』と、ジ  
 リ／＼膝を進めた。

〔三九〕

憂ひの玉箒！、何んといふ美しい名であらう。

『深くめしあがりましてはお毒にも相成りませうが、何有、適度にお用ひ遊ばせば

百薬の長——所謂その天の美祿でございます。幸ひこれに川浦子爵様から御歸朝のお祝ひに到来のウヰスキーがございます。これ拙者が一つお酌を仕りませう」と、堅策は立つて架上の洋酒を取り、小形の洋盃になみくと注いで、伯の身邊へさし寄せた。

始終無言で堅策の爲すがまゝ、にうち任せてゐた光正伯は、ヤハリ無言のまゝ、衝と洋盃を取り上げたが、唯一息に飲み干した。

「ヤツ、これは強い、御洋行前は、さほごめしあがるやうにも心得ませんでした。ありがとうございました……ハ、ア、矢張 彼地で強い御酒ばかりめしあがりつけましたので、お手が上達りましたと見えまするな。イヤ、その御様子では大丈夫でございます。サ、どうぞ今一盃お越し遊ばせ」と堅策は又注ぐのである。

伯は相變らず沈黙をつゞけつつ堅策の注ぐウヰスキーの洋盃に凸となるまで湛へられのをジツと見据ゑて居たが、やがて再び取上げると、唇を切るが如く横ざまに満を引いた。

「これはお美事、實際恐れ入りました」と、堅策は珍らしげに賞めそやす。

「駒田君、君も一盃如何ですか」と、伯は漸く口を開いて、

「さア、わたしが注いで進げやう」と洋盃を差す。

「こ、これはどうも恐縮いたします」と、堅策は、あわたしげに其盃を受けたが、恭々しく押いただいて、

「では、御遠慮なく、お相伴を住ります。恐入ります、恐入ります」と、満々と受けて一寸口をつけて下へ置く、

「グツと干しては如何かね」と數日來食事をさへ怠り勝ちな上に元來下戸の光正は強烈な酒の酔ひが遽に發して、蒼白い顔に儼然と紅を潮しつゝ、酒氣を吹いた。

「イエ、拙者は餘り嗜なみませぬ方で……」と堅策はモヂくする。

「イヤ、君の飲けるのは知つて居る。遠慮に要らん、グツと干して下さい」

「は」と、堅策は頭を掻いたが、

「では、折角の仰せでございますから頂戴を仕ります……併しそれは餘り満々にご

「ございますので……」と、洋盃を取上げて透して見る。  
「さ、早く干し給へ、君にも似合はん弱いではないか、ハ、ハ、」と伯の舌は稍く滑らかに成つた。

「では、思ひ切つて頂戴いたします」と、堅策は苦さうにして三口ばかり飲み干した。

「貰ひませう」

「はっ」

「酬して貰ひませう」と、伯は手を出す。

「此盃を……」と、堅策は驚いたやうに「勿體もない、拙者風情の頂戴いたしました盃で……。あれに新しい盃がございますで……」と、立ちかけるのを伯は押へて、

「宜しい、其盃宜しい、モウ一つ満々と注いでくれ玉へ」と奪ふやうに洋盃を取つて勢ひよく差出した。

「併し餘りお過しに成りましたは……」と堅策は眉を潜めて氣盡はしげに故意と躊躇ふ。

〔四〇〕

「あ、實に好い工合に酔ひました」と、無理に注がした三盃目のウ井スキーを干し、光正は酒氣を虹のやうに吹いたが、

「いかさま憂ひの玉箒です。ハ、ハ、」と、愉快さうに笑ふのであつた。

堅策は例の狡さうな眼で瞥然瞥然と見てゐたが、

「ヤ、それは實に結構でございます。過日來の御心勞の御様子、拙者家來の身どいたしましたは、實際お見上げ申すに忍びませんのでございました。これと申すも令夫人並に正司様の御亂行……」と、いひかけて「イヤ、これは、と、ただことを申出しました。折角御機嫌の直りましたところを、誠にハヤ心づきの無い

不調法を仕りました」と、頭を下げるのであつた。  
伯も一時は颯と顔を曇らせたが急に又洋盃を引寄せて、這回は手自ら酌をして、グツと干した。

「これは何うも……」と、堅策はサモ驚いたやうに伯の顔を見て、  
「左様なことを遊ばしましては……」と、危む如く口ごもる。

「ハ、ハ、ハ、なんの君ウ井スキの四盃や五盃、ハ、ハ、ハ」と、光正は元氣らしく笑つたが、それがいかにも故意とらしくひいた。

「イヤ、無論米國仕込みでゐられますで、お氣違ひはございますまいとは存じませんが……」

「大丈夫、この位なことで酔ひはせんです」酔つた人の癖として酔つたといふ口の下から酔はぬといふ光正の面は火のやうに赤かつた。

「御前、たいぶ好いお色にお成り遊ばしましたな」

「然うか」と光正は我が手で我が頬を押へてみたが「では、モウ一盃と」洋盃を取

上げるのであつた。

「ではお酌……」と、今度は堅策は制めやうともせず、いふがままに酌をしたが、  
「此兩三日好いあんばいに晴天が續きますで、たいぶ梅花が宜しいさうにござい

ますな」

と、話を轉じた。

「ほう、何處の梅が咲いたかね」と、光正も釣込まれて問ふのである。

「はい、蒲田、大森邊は、ちらほら人も出ますさうで、アノ邊は南郊でございませ

事、ヤハリ早いかと存じます。御前、如何でございませう、ちとお出かけに成

りましては……？」と、水を向ける。

「サア」と、光正は、また遊山に出るまで心にゆとりがなかつた。

併し、斯様に垂籠めてばかりおいで、は、お身體がたまりません。拙者お供を仕

り度うはございますが、何かと用事もございませう……オ、丁度甲斐澤か

手隙でをります。彼れは却々話術にも長け、至つて正直な面白い者でございませ

今日は一つ甲斐澤をお召し連れ遊ばして、蒲田あたりまで御散策遊ばしませ。ナ  
 アニ梅花は梅花といたしまして、斯様な好天氣に物珍しい郊外の御散策は第一御  
 健康のお爲めになります。別に御準備遊ばすまでもございませぬ、そのまゝで結  
 構で……。唯今木村に申つけまして早速自動車を用意いたさせませう。その間に  
 今一つお過し遊ばせ」  
 と堅策は、光正に口も開かせずすがに半ば飲み残してある洋盃の上へ、又満々  
 と注ぎ補して、答へも待たず獨り會得み、倉皇として室を退つた。

〔四一〕

先に千仞の魔ヶ谿に陥つた正司は、其夜洞の裡に熟眠つたが、例の愛犬エスが耳  
 元で吠える聲におどろき覺めると、夜はいつしか明け放れて、谿底ながら日の影が  
 華やかに射して、雪は夜のうちに融んだらしく、昨日とは打つて變つた好天氣であ  
 る。

「あ、熱く眠つた」と、正司はやをもち身を起して、ノサノと洞外へ出たが、まぶ  
 しさうに空を仰いで、

「む、實に好い天氣になつたナ」と、小手をかざしつ山上をふりさけ見ると、今  
 朝はふしぎに不斷の雲霧も晴れ渡つて、昨日斷崖を踏みくづして陥つたところど覺  
 しきあたりには、見覺わのある一本の大樟樹が巨人の如く立つて居る。その梢にかゝ  
 やさわたる太陽を望み得たのである。

「オ、太陽！」  
 正司は我れ知らず、斯う叫んで半ば無意識の如く、高く、高く柏手を打つて此れを  
 拜した。

「ア、何んといふ壯美、光であらう」と、正司は然う思つた。而して、百萬の味  
 方を得たやうに力強く頼母しく感はれるのであつた。

「實に不思議な力だ！世に日本の國民が旭日に對した時の心理状態ほど玄妙なもの

はあるまい。然うだ！曾て出征した時も彼の荒涼たる戦場で、此の壮麗な太陽の光りを仰ぐと、口にも言葉にも盡されぬ心強さを感じたッけ……。應、われは日本の本の民である！といふ、強烈い、堅實い、そして耀やかなしい心持になつたものだ』と、正司は往事を追思して、そゝろに凛々しい眉を上げた。

而して十分に元氣を増したのである。

「さア、今日から洞穴の探険だぞ。エス！、きさま確乎しろッ」と、積雪で嗽ぎ顔を、淨め、焚火を盛んにして、復焼肉の朝餉をとつた。

食事を終ると、正司は残る肉類を悉く焼肉に調て、携てる丈け身につけるのであつた。

「さア、そろ／＼出發だ』と、昨宵あらかじめ準備をと、のへておいた食糧品を、

一半は自ら脊負ひ、他の一半は振分けにして、エスの脊中にシツカリと脊負はせて

「重いだらうが辛抱しろ、おれときさまの命の綱だ。よしッこれで可い』と、手叩きをしたが、忘れ物はないかと見廻す足許に、ゆふべ敷寝の乙倉の外套が在つた。

と見ると、ゆふべは心づかなかつたが、衣匣から白いもの、端が見えてゐる。

「何物だ？』と、正司は何心無く、引出して見ると、それは一封の書簡であつた。

「ハテナ』と宛名を見ると、甲斐澤と乙倉とへ宛てたもので、裏面を返して見るとKの一字！

「何んだ知らん』と、披いて見たが『ヤッ、これア駒田の手跡だ、待て／＼』と、片膝折敷いて、

「何、かねての儀遂行あらば必ず十分の報酬を贈るべく候。但し承知の如くMは却々の剛力なる上柔剣兩道にも達し居れば、他の者共にも注意を加へ、萬々仕損じ無きやう頼入候、死骸など遺り候ては後日に面倒なれば、なるべく魔ヶ谿へ突落さるゝを上策とす。若し其儀意の如くならざる時に多勢を以て撃殺し、死骸を谿底へ投込み後患を断たれたし』と、讀み來つて、正司は轉た愕然として滿身の血も凍るばかりの心地がした。

「ム、では駒田の指圖であつたか。Mとは正しく此の正司を指したのだ。それにしても、駒田の如何んの必要があつて此の乃公を殺さうと謀りをツたのか？」と更に次の條を讀みつゝけたが看る看る颯ツと顔色を變へて、

「此の文面で察すると、駒田は氷室家を横領しやうといふ野心で、まづ邪魔になる此の正司を片づけた上、お姉エ様を陥れ、お兄イ様を欺いて……ム、」と、齒を切つたが、

「あ、乃公はこんなところに愚圖々々しては居られんのだ……といつて此の斷崖を攀ち登る術はなし……あ、胸が騒ぐ、肉が躍る憎むべきは駒田、呪ふべきは堅策だツ」と、身をかきむしつて悶へるのであつたが、や、あつて心を鎮め、  
「さうだ、いつまで斯うして居ても爲様がない、ヤツバリ此の洞穴を進んで、一方

の活路を求め得んければ成らん。いたづらに煩悶してゐる場合でないぞツ、邪は正に勝たすと云つても、万ヶ一駒田の奸策が行はれたら、それこそ氷室伯爵家の一大事だ、お兄イ様やお姉様のおからだに、どんな變事が發らぬとも限らん。實に一刻も猶豫のならん場合だ。氷室家に取つては、興廢にかゝはる椿事だ。……といつても、急に邸へ歸つて、駒田を押へて奸を働くわけには行かん。あ、殘念だ、じ、實に殘念だツ」と拳を握り足摺して、且憤り、且悲しんだが、やがて屹と心を決めて、件んの密書をわが衣匣深く納め、銃を杖ついて、勢ひ猛く立上り天の一方をハツタと睨んで、

「おのれ駒田ツ、記憶わてをれツ」と咽喉に血も浸むかと思ふばかりに絶叫ぶのであつた。

伶俐なる愛犬エスは、主の尋常ならぬ氣色を見て、憂はしげに其の顔を見上げつゝ鼻を鳴らす。

「エス歟、察してくれ、乃公の心は狂ひさうだ。氣、氣、氣が違つて了ひさうだ」



ど、身を顛はしたが、

「イヤ、愚痴だ。そんな事をいつてゐる手間で一步でも前進む方が得策だ。エス、行かう」と、先に立つて再び洞穴の裡へ進み入つた正司は、その豪膽な心にも洞外の明るさに引かへて洞の裡は歩一步暗く成り行くにつけ、日の光から遠離り行く心細さを感せずには居られなかつた。

エスは主が逸早く歩きはじめたので、勇ましくブル／＼と身ぶるひして、重い荷物を脊負ひながら、おくれじと跡に跟いた。正司はそれを顧みて、

「エス、きさまは畜生ながら忠義な奴だ、それに引きかへてアノ駒田堅策は……」と、憤怒に堪へぬ色を作した。

寔に、人面獸心と俚諺にはいふけれども、人にして獸の心にも如かぬ輩も、此の現社會には尠少くない。友を賣り、夫を賣り、主を賣り、其甚だしきに至つては國を賣る曲者さへある。唯り駒田堅策のみを責むべきでないかも知れぬが、色を令くし言葉を巧にして貞淑並なき美佐子夫人を欺いて誘拐し、服心の悪人に命じて

正司を危地に陥れ、剩へ温良なる光正伯に對しては、夫人と正司と密通して逐電したと誠しやかに偽はり聞えて、酔ひをすゝめて心を紊し、更に何事を企んで、わが思ふ壺に笮めうとする、憎んでも猶餘りある極悪人といはねばならぬ。

〔四三〕

氷室伯爵夫人として、何暗がらぬ身でありながら、奸臣駒田堅策の毒舌に欺かれて、住み慣れた山の手の邸を出で、ひなさがる柳島の、怪しげなる家に伴はれた美佐子夫人は、早くも半月を其家に過したが、わが身に着たる濡れ衣は、何時乾くとも白妙の、すい／＼とも訓む雪は消えて、垣越しに見る野面には、むらく／＼と若草も萌に初めつ、野生の梅にも春の信に疎略は無く、鶯の時知り顔に、ほう、ほけ今日も來鳴くさへ結ばれし心を解く因がどはならで、還つて在りし邸の居室の軒の春邊も偲ばれつ、いと、涙の種添ひて、誰が爲めにか容づくらむと、取り上

げもせぬ緑鬚の亂れにも、憂きに亂る、心状は見えて、柳眉は愁の雲にとざれ、涙の雨の痕新なる双頬にはいたく憔悴が見える、前宵も亦、宵戸の田の面にうち騒ぐ雁が音に、思ひ寝の夢を破られて、飛禽にすら親子夫婦の情はあるを、われは夫に捨てられて、かゝるいぶせき茅屋に、そも何時まで潜む身ぞと、思へば目は牙の神経は興奮り、そのまゝに徹夜したので、いとゞしく顔色も蒼白、悼々しさも一入である。

怖れでも猶ほ怖るべき堅策の悪計は、もとより知るべき筈もない美佐子は、たゞ一圖に誠忠無比の家來とのみ信頼ふので、彼れが齎らす邸の消息は、ことごとく之れを事實として聞くのであつた。

先日堅策が來た時の話によると、伯爵の種を宿した狎妓はさすがに未だ邸へは入れぬさうだが、程近いところに家をもたせて、伯爵は日夜其處へばかり入り浸つて歸朝を祝ひに訪れ來る、幾多の同族知友にも所勞と稱して會はぬといふ。然うした方では無かつたが、何んといふ變り様であらう。

渡米前、伯爵が自分に對して傾けた愛情は甚處であつたか、世に睦まじい夫婦はあれど、斯程までに伉儷完き夫婦は稀ぞと、然る家庭雜誌にも仰々しく記されて、並んで撮影した二人の寫眞まで掲げられ、同族の甲乙から、

「全然畫に描いたお雛様のやうですね」と揶揄されたことも幾度か!

それはもう、表面ばかり睦まじさうで、その實は夫婦の間に風波の絶ぬ某の子爵や、くれがしの男爵など、人の噂は聞きもしたが、わが親愛なる夫光正伯に限つては、眞に心の底の底から、足らはぬ自分を愛してくれた。

堅策の詞によれば、渡米前から其の女に關係があつたらしいが、然うした氣ぶりは露ばかりも見えなかつたのは、そもゞ自分の迂濶であつたらうか?

〔四四〕

洋行前、夫のそぶりに氣がつかなかつたのは、わが迂濶の過りか?、然ういへば

其の砌、光人が夫の膝にすがつて、一しよに伴れて行つて下さいと甘へた時、いつにたく可怖い顔をして、お前はお母様とお留守居をしてゐるのですよ、と嚴かにいつたのも、裏面に然うした狎妓が在つて、同行する豫定であつたからかも知れないか？

結婚當時、新婚旅行をした時にも、日本ばかりでは興がうすい、いつかは折と見て海外へも伴れて行かうと有仰つたことさへあるのに、絶好の機会ともいふべき去年の渡米に、どうだ一しよに出かけて見ては？とも仰有つては下さらなかつた！

それは事業の上の必要について疎かならぬ視察の爲めの洋行にはちがひないから足手まごひがあつては、却て不便でもあらうけれど……否、否、其の視察といふさへ、今となつては口實に過ぎなかつたかも知れない。たゞその狎妓と遊びに行く爲めに、視察の研究のと美しい名に隠れて、そして氣まゝな旅行をされたのではあるまいか！

と、美佐子の胸は千々にみだれて考へれば考へるほど心細さが増ばかり。或は

此のまゝ、もう二度と再び邸へは歸れぬ身となるのではあるまいか？

斯う考へると、満身の血も凍るばかり、涙は雨と流れ落ちて、物狂はしきまで心が騒ぐ。

堅策の話では、今の場合、急に諫めても、それは却て燃わさかりつゝ、ある猛火に油を注ぐやうなものであるから、今暫らく時機を見合せて、おもむろに反省、要めるつもりだといふのだけれど、嫩葉のうち摘まずして、斧を用ゐねばならぬやうになつては悔んでも甲斐があるまい。

それにつけても正司さんは怎麼されたか？

自分が邸を去つて以來、そよどの風の便りも聞かぬ。堅策に聞けばヤハリ邸を出て、しばらく身を隠すといつて飄然として去つたまま消息を聞かぬといふ。

自分どちがつて堂々たる男子でもあり、夫の爲めには天にも地にもたゞ一人の肉身の實弟といひ、平常分別のたしかな人であるのに、何故手を拱ぬいて成行きにのみうち任せては居るのであらう？

それこそ堅策と相談をして、ともどもに心を協せ、夫の迷夢のさめるやう、何故力をつくしては下さらぬ？

昨日今日と思ふうち、もう半月も斯うしては居るが、そもく何時の日に夫の目が覺めて、母子二人邸へ呼戻され。昔のやうに楽しい團樂が出来てあらうぞ。戀しい夫、可懐しい邸、寝ても覺ても忘れられぬのは此れである。

わけて此の一日二日、光人が流行性感胃の心地で、氣むづかしく熱に浮かされて譫語にまで邸へ歸らうと云ふのを聞くと、身を切られるよりも艱く感じる。

嗚呼光人さへ無くば……と、美佐子は自ら死ねぬわが身を怨むのであつた。

〔四五〕

駒田家令に勧められ——といふよりもむしろ押着けられた形ちで、酔ふてフラフラする身體を駒田と甲斐澤との二人が、りで、昇ぐやうにして自動車へ乗せて了は

れた光正伯は、車の動搖につれて強烈な酒の酔ひがいよく發し、假睡むともなくウトウトするうち。

「御前、蒲田へまゐりました。御前、御前」と、甲斐澤に揺り起されて、不圖目を開くと、自動車はいつしか城南蒲田の梅屋敷の門前に着いて居る。

「あ、よく眠つた」と、光正は生欠伸をハンカチーフで押へつ、亂れた襟をつくるうて、車を降りた。

が、まだ酔ひは容易に醒めず、ともすれば踏跟めく足許を踏めめつ、室内に進み入る。

甲斐澤は運轉手の木村九市と、一寸瞳を合はしたが、急いで光正の跡についた春まだ淺き梅園には、訪ひ来る騒客も多からず、午後から吹き出した風は春としもなく身に浸みる。

「御前、なかくお寒うございますな」と、いらふの甲斐澤は鼻の頭を眞赤にして鳥肌立つた黄色い顔を獅噛めるのであつた。

光正は朦朧とした醉眼に其れを顧みて、

「寒い？、ハ、、、」と、呵然として唯笑ふ。

「でも、非常に寒くなりました。自動車の内では然ほにもなかつたですが、此邊は海が近いので、風が強うございますからなア」と、頻に頸を萎縮めるのである。

光正は駱駝の外套の毛皮の襟を立て、深く双頬を埋めたま、纒かに咲きこめた梅の樹陰を逍遙する。その後を甲斐澤は迷惑さうに跟いて行きながら、でも據ろなく「御前、よく咲いてをりますな、併し寒いですな。最も風流は寒いものは申しますかな」と例の赤くなつた鼻を摩擦る。

「君は和歌か俳句でもやるのかね」と、光正はステツキに身を支えて又甲斐澤を顧みた。

「イエ、どういたしまして」と、甲斐澤は頭を搔いて「どかく、われわれは花より團子でございますへ、、、」と、輕薄笑ひをする。

「花より團子？成るほど」、光正も微笑んで「では君は、下戸の方かね」

「イエ、必ずしも下戸ではないので……………」

「フーム、それでは餘程飲ける方かね」と、光正は猶ほ醒めやらぬ酒氣を吹いてゐる。

「ハア、實は少々ばかり……………」

「ホウ、それは話せる。ハ、、、。では邸へ歸つたら、君にも酔ひを頒たうかね」  
「恐れ入ります」と、甲斐澤はヒョコリと叩頭をしたが「御前、デハ、日の暮れませんうちに、そろそろお歸り遊ばしては如何でございますか」

「ヤ、これは現金な男だ。なるほど花より團子の方だね。ハ、、、」と、光正も酒機嫌の、近頃になく氣も晴れて、始終莞爾やかに相手になつた。

暫くして光正伯は、又自動車に乗つて蒲田を出たが、元來た道に興か薄いと、甲斐澤が木村運轉手に命じて銀座の方へ向はせた。そして、かねて其の心組をしておいたと見えて、車上ながら甲斐澤は、ポケット用のウヰスキーを取り出して光正に侷めるのであつた。

深く嗜まぬ酒ではあるが、酔うては胸の結ほれも解け、何とは知らず氣も華やぎ曠昔までの心の憂さも、忘るゝにはあらざれど、然までには覺ぬやうで、光正は酒の眞價を、はじめて知つた心地がするので、獻さるゝまゝに盃を受けつゝ、

「ホウ、これは用意周到だ。君はまつたく好きと見ゆるね」

「イエ、然う仰有られますと、大いに恐縮するでございますが……これは事實御家令が若し、御前様が御所望遊ばした時に差上げるやうにと、小生にお渡しになりましたのでございます」と、甲斐澤はいひわけらしくいふ。

「駒田君が……」と、光正はジツと盃中の物を見たが、此時車が強く揺れたので、ウヰスキーがゴボリと波を打つて、危ぶく溢れやうとしたのを、光正は急に口を寄

せて飲み干した。而して、細いところまで注意を怠らぬ駒田堅策の心づくしを嘉すべしと思つた。

・彼の雪の積るのを見ると、たゞ一本の藁しべでも、たゞ一枚の落葉でも、それを根にして積るには早い！

あくまでも忠實な臣と思ひ込んでゐる光正には、堅策が與めにするところあつて爲た事も、還つて好意と見られるのであつた。

「サ、もうお一つ」と、甲斐澤が隙かさず注ぐ。

斯うして光正は、又三盃四盃重ねたが、さらでも下地のあるところへ飲んだので酔ひは益々加はるばかり。

それを見済した甲斐澤は、自動車の新橋近く來た頃、ほこり除けのガラス越しに運轉手の木村に目くばせした。

と、元來謀る所あつたものと見えて、木村は急に車を停めた。

「木村君、何うしたのです？」と、甲斐澤は、光正に聞ねよがしに、備へつけの喇

叭から嘯鳴る。

「エ、何に、故障が出来たツ、そ、そりやア不可、困ったなア」

「故障？」と、光正は甲斐澤の方を見る。

「はア、何か故障ださうで……」と、光正の詞をうけながら甲斐澤は猶もラツバに口を寄せて。

「木村君、どうですね。急には修復りさうも無いですか」と聞く。

木村は、早々運轉臺から降りて、しばらく故障の箇所を調べて居たが、やがて外部から扉を開けて、恭しく帽子を脱ぎ。

「御前様、誠に申譯がございませませんが、發動機に少々故障が生じたので……イエたいした事はございませんと存じますが、一寸修繕します間、しばらく其邊でお待ち合せを願ひ度う存じますが……」と、面目なげに頭を掻く。

甲斐澤も、困つたやうな顔色を作へたが、

「御前、デハ恐れ入りますが一寸お降りをお願いしまして……」

「降りるのかね」と、光正は醉眼を木村に向ける。

「誠に恐れ入りますが、一寸御猶豫を願ひたいのでございます」と、運轉手は幾度か叩頭をする。

「併し、立つてゐてお待ちを願ふわけにも行かんが……ア、丁度よいことがございます。デハ御前、其處まで御徒歩を願ひまして、銀座のカフェー、ペラミーで暫らく待合はせることに致しませう」と甲斐澤は獨り心得顔に、酔へる伯爵を扶け誘ふて唯有るカフェーへ伴つた。

戸外は薄暮の昏きに引替へ、カフェーの内部は電燈の光眩ゆく、芳烈な酒の香が咽るばかりに室内に籠つて、彼方此方の卓子では、若い男女の笑ひ聲が其の薫らす煙草の煙りと、もに渦を巻く。

カフェーペラミーのドアを排した光正と甲斐澤は、一隅の卓子に着いたが、甲斐澤は逸早く給仕女を雇いて、

「御前、何を申しつけませう？」と問ふのであつた。

光正はいたく酔うて、頭がフラフラするので、卓子に肘を懸せて前額を支へたま

「わたしは別に好みは無いから君い、やうにしてくれ玉へ」とばかり、ただ酒氣を吹いてゐる。

「はア、ではカクテルと、何か美味さうなものを二皿ばかり……」と、甲斐澤はさし心得て女に命じる。

「畏まりました」と、雪のやうなエブロンを懸けた十七八の給仕女は、巧みに多数かの卓子の間を縫つて、小股刻みに忙しさに去る。背後の結んだ白い裂が、蝶のやうにヒラ／＼と動いて、夢から抜けて、も來たかのやうに、朦朧たる光正の醉眼に映じた。

俄爾！光正の脳裡に、或る可懐しい追憶が浮かんだ。そして我れ知らず其後姿を見送つたが、刹那に他の感情——それは憎悪と嫉妬とに充ちた、一種言ひしらぬ感情が胸に充ち満つるのであつた。

光正が沈黙り込んでしまつたので、甲斐澤は何か頻りに其處らをキョロ／＼と見廻したが、彼れの欲する或物は未だ目に入らぬ。

「御前、々々」

甲斐澤は何をがな光正の氣をまぎらさふと——それは主人をおもふ忠義からでも親切からでもなく、私に與めにするところあつて、

「御前、ど、どう遊ばしました、ハ、ア、お酔ひでございますか、イヤ、存外お弱いではございませんか」

「弱い？」

光正はムツクリと頭を擡げて、

「酔ひはせん。ナニ此の位の酒に酔ふものか」と、急に身體を固くして、



「酒々々、ウ井スキーを拿つて来いッ」と、囁語のやうに口奔るのである。やがて詭へた物が来る。甲斐澤は盛んにフオークとナイフを動かしたつゝも、絶えずドアの開閉に氣を付けてゐる。ど、入口が半ば開いて、白い顔が、誰ぞ彼れの戸外の暮色を背景にして、ポツカリと浮出した。バツと射す電燈の灯影を斜めに、キラリと光つたのは、帯止めの金具に鑲めたダイヤであつた。

## 〔四八〕

熱が高度いとは思つたけれど、さまでのこと、も思はなかつた。光人は、曉方から幾度となく痙攣けさうになつたので、美佐子はいたく驚きあはて、例の老婆に起きて貰つたが、醫師をといつても近所には無し。濡れ手拭で頭部を冷却し、老婆のあんかを借りて足部を温め、夜が明けると直ぐ醫師を迎へて診察して貰ふと、病症は

流行性感胃だが、肺炎に變る懼れがあるといふ診断にて、美佐子はいと胸を痛め老婆を頼んで氷嚢やら氷やらをと、のへさせ、其の身に光人の枕邊につき、りて、たゞ一心に看護に耽つた。

よしや最愛の所夫に見捨てられるとも、これあるがゆるに死にかねて、わが生命とも手頼る光人が此の有様、美佐子は泣くにも泣かれぬのである。

過越し方を顧みると、在りし昔が走馬燈のやうに眼の前に往來する。

幼くして父母におくれ寄る邊なき身を叔父夫婦に養はれて、稍もの心のつく頃までは、飢ゑも凍えもせず育つたが、十六の年の暮れ、もう算へ日といふ押詰つた師走の二十日過ぎに、叔父なる人は突然卒中で死ぬ、跡は病身な義理ある叔母ひとり、年が年中病床に親しんで、起居さへ身一つでは叶はぬ有様であるから、おのづと心もひがみがちで、氣むづかしさも尋常ではない。

叔父の母の弟で、血を別けた仲であつたから、美佐子も稀には我まの鼻を一つや二つは鳴らしもしたが、叔母は今述べ義理ある仲といひ多病の身、況して夫に後

れてからは、殆ど愚に返つてしまつて、手がつけられぬ有様なのを芙佐子は親切に看護して、痒ゆい所へ手のとやくやうにするが、それでもまな氣にいらぬか、箸の上げおろしに叱言が断えぬ、それをジツと辛抱して、病人の氣に逆らはぬやう逆らはぬやう、心を盡して面倒を見るのであつたが、無い壽命は如何とも詮方なく、翌る二月の末に、遂々夫の跡を追ふた。

渡る世間に鬼はない、といふけれど、さうばかりも断はれぬところが即ち世間で親切といふ假面を被つて貪婪な心の爪を磨ぐ、怖ろしい曲者も尠くない、芙佐子が美しい顔の所有主であるだけ、それだけ一層危険は多いのであつた。

叔父の親友と自稱する男が、跡始末一切を引受けて叔母の葬儀やら何やかやらで勝手次第に撒廻してゐたが、芙佐子を良いところに奉公させると欺はつて、うまく近所の手前をつくるひ、尊き貞操を蹂躪しやうとしたのであつたが、家主某がその悪計を看破つて、運よく毒爪を脱がれた、けれど其の男は其のまゝ、行方を晦まし叔父の家は全くメチャクにされてしまつたので、芙佐子は明日が日から、身振

り方に當惑したのを家主が憐れんで、親戚に當る去る所へ、當分手傳ひ遣つたのである。

〔四九〕

環の端無きが如く、追想る過ぎ越し方、それは例へば時雨る、頃の、雲のたゞすまゐにも似たる哉、芙佐子は若かりし時の、苦勞のありたけを偲ぶにつけても、九年以來、夫によりて、楽しく、安らげ、榮ある人の世の生活をつづけしありがたさ、勿躰なさをおもへば、たとへ此身は此のまゝに、野のする、里のする、山の奥に捨てらるゝども、怨むべき道理はないと、其のつゝ、ましやかな、美しい心根には、思はずには居られなかつた。否、然う思ひ得るほど——否々、然う思ふともなく、おのづから然う思はるゝほど、芙佐子の心は美しくあつた。

「お父様、お父様」

突如として光人が又熱に浮されて二夕聲ばかり、それは、何にたとへん方もなくもの悲しくも、ものあはれなこゑで呼ぶのに驚かされて、美佐子のイリュージョンは破れたのである。夜半の嵐に、白雲かと咲き亂れた櫻花が散るやう！  
病みて殆ど正氣のない、幼ない光人さへ、父を慕ひ家を懐うて、夢寢の間にも「父よ〜」と口ばしる。況して美佐子の心の中は怎麼あらう？

「嗚呼、お目にかゝり度い。改まつての御對面は能はぬまでも、垣根の隙、襖の陰他所ながらも唯一目なりとお顔が見度い」よしそれとても叶はぬとならば、暗夜に訪ぬる白梅の香が、雲に隠れし月の前の子規、たとへ容姿は見えぬまでも、セメテ聲だけなりと聞き度いと、美佐子は煩悶ゆる胸を抱いた。

時に、戸外に俤が停つて、訪ふ人の聲がした。もとより淺間な住居であるからそれは誰ぞと訝かるまでもなく、現下の身には杖とも柱とも頼む、聞慣れた家令駒田堅策の聲であつた。

此、日頃、堅策の他には誰れあつて訪ふ者もないのであるから、おのづから其の

人の來るのも待たる、までに可憐かしくおもはれるが、併し、それは堅策其の人を待ち焦れるといふよりは、彼の齋す報告が待たる、ので、今日のしらせは凶か吉かと、モウ胸が轟くのであつた。

其處へ駒田堅策が、心の刃を深く隠して入室つて來た。

「駒田さん、よく來て下さいました」と、美佐子は堅策の坐に着かぬうちに詞をかける。

「兩三日、御無沙汰を仕りました」と堅策は頭を下げたが「ヤツ、これは若様には……と」眉を蹙めつ摺寄つて氣遣はしげに光人の寢顔をさしのぞく。

「感冒から肺炎に變りさうだと申すことで、何分熱が高度いのでねエ」と美佐子は聲をくもらせる。

「それは困りましたことでございますな。近來非常に症の良くない感冒が流行りますが十に八九は肺炎に變病りますさうで……。何しろ困つたことでございます」と吐息を吐いて不安らしく腕を拱む。

美佐子は堅策 詞の端々が犇々と身に應へて、宛ら豫言者の暗示でも聞くかのやうに心が顫ゆるのであつた。

## 〔五〇〕

光人、病氣を見てあまた、び歎息した駒田堅策は、やをら拱いた腕を解いて、膝に手を置き稍しばし、さしうつむいて詞もなかつた。美佐子は其の状態を見ると、まだ光正の心の舊に復らぬのを直覺したが、さすが豊夫に引かされて。

「而うして、御前様の御機嫌は？」と、可怖可恐ながら問ひかけた。

「其の事でございます」と、堅策はいかさま思ひ餘つたやうな語調で口を切つたが「實に言語道断でございます」と、ため息を吐く。

「エ？、では、その狎女とかいふ女を邸へでも……」  
美佐子の胸は騒ぎに騒ぐ。

「はい、折も折、若様の此の御様子を拜見いたしましたしては、申上げるに忍びんのでございますが……實は仰せのごとく愈々右の狎女を御本邸へお迎へ遊ばさうと申すことで、その儀につきまして、改めて手前へ御下命がございましたので、最早猶豫いたす場合はないと心得まして、失禮ながら面を犯しまして、手前みツちりと御意見を申し上げましたのでございます」

「そ、そして、御前様は、何んと仰有いました？」

美佐子は急いで、そゝろに膝を進めるのである。

「はい、それが誠にお情ないお詞でございますして、臣の身として主の詞に反對するのみか、主の所業を批難するとは奇ツ怪至極の舉動、此の上は一日たりとも家令として氷室家の家政を委せることに相叶はん。否、一刻たりとも邸へ置くことは罷り成らぬ、と以ての外の御立腹でございますして……」

「エ？、エ？、あなたをまで……」と、美佐子は且驚き且呆れて、夫の心の然ばかりに變りはてたのを悲しむのであつた。

堅策は芙佐子の様子を、例の上眼づかひに凝乎と見目成つて居たが、我が事成  
ぬと頬に浮ぶ微笑を押し隠して、いと、眉根を擡めつゝ、

「夫人！最早絶體絶命の場合でございますぞッ」と、力を罩めて言ひ断つた。

「エッ、ではモウ……」と、芙佐子は顔色を失つた。

「はい、モウ到底手前の力には及ばんでございます。今日まで御辛抱遊ばしまし  
て、御歸參の時節をお待ち遊ばしましたが、最早其のお望みは叶ふべくも無くな  
りましたのでございます。手前も今日お暇が出ましたからは、いかに苦心を仕り  
まして、氷室伯爵家の御家政につきましては、容喙すべき權利も義務も……嗚  
呼實に心外千万でございます、残念至極でございます。唯一の御相談相手ともな  
るべき正司様のお行方は知れませす、斯様な情ない事はございません」と、堅策  
はハラ／＼と落涙した。

咄、憎悪むべき偽涙！、いかに口が横に裂けたればとて、よくも斯くばかり虚妄  
の言が出たものだ。が、芙佐子はあくまで堅策を信じてゐるのだ。

「駒田さん、ではモウ望みは絶えたのですか。甚麼したら可いでせう？、わたし丈  
けの事ならば、たとへ何のやうにならうとも厭ひませんが、光人だけは埋れ木に  
したくありません」

「御道理でございます」

「駒田さん、どうぞ分別をして下さい。光人が不憫です、光人が……光人が……」  
芙佐子は遂に保ちかねて、ワツと聲を揚げて泣伏した。

その、象牙を展べたやう眞ッ白な芙佐子の美しい襟足を、ジツと見つめた堅策の  
瞳は、燃えるばかりに輝いた。

〔五一〕

當下駒田堅策は、一種名状すべからざる物凄しい微笑を双頬に浮かべてシリ、と膝  
を進めたが泣き伏したる芙佐子の脊へそつと手をかけて、

「夫人！」と、呼びかけた、その聲は怪しく顫えを帯てゐた。  
 芙佐子はわが脊へ堅策の手が觸れたを感じると同時に、何とは知らずパネにでもか、つたやう、急に身をおこしたが、いそがわしくみだれた衣紋をかいつくるひ、毅然として見迎へた。

堅策もハツとした様子であつたが、直ぐに然あらぬ體に復つて、

「夫人！御心中は万々お察し申上げます。が、それにつき駒田が改めて御相談を願ひ度いことがございます。これは是非眞面目にお聞き取りが願ひ度いと存じます」  
 「改めて御相談と仰有ると……」

「はい、これはお互様に、最も大切な問題でございます。只今も申上げました如く御前のお心は到底舊へ復るべき御様子もございません。最早彼の小艶と申しまする狎妓に魂をお奪はれ遊ばしまして、うつ、他愛もないのでございます。現に罪科もない夫人や若様を亡ものにしてまでもといふ、世に恐ろしいお考へをさへお持ち遊ばすやうにおなり遊ばしたのでございますで、駒田風情を御放逐遊ばすに

何んの御猶豫も御會釋もないことは勿論の儀でございます。就きましては夫人、此際お互ひにシツカリと思案を定めねばなりません」と、堅策は復膝を進めて、  
 「三度諫め、身退くとか申しますで、手前も斷乎としてお暇を頂戴致す決心を仕りました」

「でも、今あなたが然ういふことになつては、わたしや光人は誰れを便りに再び邸へ……」と、芙佐子の詞を遮つて、

「夫人、どうぞ此際十分のお覺悟を以て私の詞をお味はひが願ひたう存じます。ソコデまづ先決問題として、今日かぎり、斷然お邸へお歸り遊ばさうと思召すお考へは御斷念を願ひ度いのでございます」

「エツ、斷念……アノ邸へ歸ることを斷然めると仰有るのですか？」と、芙佐子は寧ろ呆れたやうに、眼を睜る。堅策は冷然として、

「左様！仰せの通りでございます」  
 「でも、何うしてそんな事が……」

「イヤ、然うした御決心のお能なさらんと申しましたところで、既に御前のお心は失禮ながら貴女様から離れて了うて居るのでございますぞ」

「……………」

「夫人！此處が大事な處でございますぞ。此の場合、最早フツツリとお邸の事はお断念の遊ばしまして、此の駒田堅策と、御同棲遊ばすことに御決心遊ばしては甚麼でございますか」

「エ、同棲……………」

「いかにも、駒田堅策、即ち斯く申すわたくしと御同棲……………早く申せば、此の駒田の妻として、氣樂にお暮しなさつた方が御得策かと存じます」

「な、なんとおいひですッ」

「美佐子は餘りに意表に出て、堅策の詞に愕然とした。

「何も其の様にお驚き遊ばすには及ばんではございませんか。堅策は、たゞ飽までも、貴女や光人様をお可愛さうに存じて申上げるのでございます」

「……………」

「甚だ失禮至極な儀ではございますが、貴女には事實上御實家——即ちお里方と申す者がないのでございませんか。最もお興入れ當時、便宜上亡なられた叔父御様のお宅の家主とか申すのが、臨時にお里方として……………は、イヤ、左様な事は、手前から申上げんでも貴女御自身の事でございませぬ、よく御承知の事でございます。それで申しにくい事ではございますが、貴女は叔父御様の歿後、右の家主の世話とやらで赤門前のピヤホールに御奉公を遊ばしてお居でございませしたなア。赤い帯に白いエブロン、蝶のやうに舞ひ、雲雀のやうに囀るお仲間の給仕女連と御一緒に、自墮落な生活……………否々快濶な御生活を遊ばしておいでございましたッけな、は、は、は、と堅策は皮肉らしく笑ふ。

堅策は尙も曇みかけて、

「夫人、堅策は、決して貴女を侮辱しめやうとて斯様の儀を申上げるのではござい  
ません。たゞ有の儘を申すので、眞實その頃の貴女方御生活は、自由な、奔放  
な彼のジブシーの女のやうに、煙草も喫めば酒も飲む、唄もうたへば戀もする：  
：お記憶がございませうな、就中貴女は、お立派な、特別な、意義のある戀を被  
成いました。氷室伯爵家の御當主で、當時帝國大學に御在學中の未來の理學士氷  
室光正様と甘い戀にお落ち遊ばしビヤホールの給仕女が一躍して伯爵夫人！實に  
思ひもよらぬ御出世で、女氏無うして何んどやら……。が、又、此度の如き、思  
ひも設けぬ御災難が降つて湧く。サ、そこが即ち浮世でございませう。ダカラ……  
いや、でございませうから、此處で御思案をお爲直しになつて、手前の詞にお着き  
遊ばした方が、將來のお爲めであらうと考へられるのでございませう」と、語調は  
わざと慇懃を装ひつゝも、呑んで懸つて頭から壓しつけるやう、苟にも「否」とは言  
はせまじき顔色を示せた。

雪に壓されし弱竹の、あはれ操節折れて、常盤の色も凋むかと危み悞る、は未  
だし、美佐子は蒼白た顔に、一種犯すべからざる嚴肅な色を現して、

「お黙りなさいツ、マア何んといふ失禮なことをいふのです。かりにも主人 妻に  
向つて、今の詞は何事ですツ」と、憤りに戦く唇を血の滲むまで、白い前歯に  
噛み締めて、轟く胸をジツと押へる。

「ハ、。、。イヤ、さう一圖に御立腹では恐れ入る。主人の妻と仰有るが、既に伯  
爵のお心が變つて、あなたは事實上御離別になつたおからだではないですか。イ  
ヤさうでもなくとも、氷室家を退いた駒田堅策は獨立獨歩の男子です、たとへ氷  
室伯爵夫人で貴女があらうとも、主人の妻とはいはせんです」と、堅策は沈着さ  
拂つて、

「どうです、そんな頑な、主従呼ば、りはお廢めになつては？エ夫人、美佐子さん  
！色よい返事は出来んのですかね」  
「汚らばしいツ」



帛裂くやうな芙佐子の聲は、生憎病める光人の夢を破つて、  
 「お母ア様、く〜と、半ば現に手を伸べる。芙佐子は其の手をシツカと握り締め  
 たが、目蓋の堰を切つて、はふり落つる熱い涙は、わりなくも病む兒の顔にかゝつ  
 た。

それをジツと見て居た堅策は、ニヤリと笑んで。

「芙佐子さん、貴女は其のお兒が可愛くはないのですかね」

「……………」

「可愛いでせう」

「……………」

「ダカラ、いはん事ではないのです、光人さんが可愛いとお思ひなら、私の心に従  
 つて、前途の安穩を計るのが、最も賢い分別でせうせ」と堅策は、愈々出で、益  
 々太い。

〔五三〕

「さア、もう斯ういひ出したからは、是非ともに承知をして貰はんければ、駒田堅  
 策男子の意地が立たん、芙佐子さん、諸といつて俺の心にお従ひなさい。戀の覺  
 めた伯爵に、いつまで未練を残してゐるのです。サ、どうです、日が暮れて了ふ  
 ですよ。何んとか返事をせんのですか」と堅策はいよいよ高手飛車である。  
 「存じませんツ、そんな無法を聞く耳はもちません」と、芙佐子は光人を抱き締  
 めて身を顛はす。

「聞く耳がないならばないでよろしいが、返事をする口はあるでせう。サ、シツか  
 りと答へて貰はう」と、堅策はスル〜と芙佐子の身邊へさし寄るのを咄嗟とば  
 かり身を避けたが、

「光人さん行きませう」と、衝と立つ裾を丁と押へて。

「何處へ行くツ」と堅策は大喝した。

「何處へ行かうとも自由です。こんな怖ろしい所に一刻も居られません。放して下さい、放して下さい」と、芙佐子は押へられた裾と振切らうと身をあせる。

「芙佐子さん、なせ貴女は然う剛情を張るのです。これほどに利害を説いて聞かせるのが解らんのですか」

「知りません〜ツ」

「何ッ、知りません？ハ、、、そんな陳套しい文句は廢して、もツと新しくもツと快濶に、氣良く承知をするといつては甚麼ですか、たとへ此處を出たところで、あなたには行くところがない筈だ」

「行くところが無いことはありません。はい、わたしは氷室伯爵夫人です」

「どツこい、そりやア不可ん。その伯爵夫人はモウ駄目です」

「い、わ、たとへ御前様のお心が變つても、わたしは飽までも御前様を所夫と思つてゐるのです。縱然どのやうなお叱りを受けやうとも、此の身を捨てる覺悟があ

れば、立派に邸へ歸られます。放して下さいッ」

「おい〜芙佐子さん、何をいつてゐるのだ。お前さんは不義者だよ。立派に邸へ歸られる身分ぢやアあるまいせ」と、堅策はガラリと調を變へて、サモ憎々しくせせら笑ひ。

「い、わ、それも御前様のお心から出た誣ひ言です。わたしの身にも心にも、汚れの無いことはもとより御承知の上ですから、わたしはチツトモ疚しくはありません」

「ハ、、、まだ解らんのか。困つたものだ、ハ、、、」堅策は肩を揺つておもしろげに笑ふ。

その隙に、芙佐子はバツと裾を拂ツて、次の室から縁側へ出やうと、障子へ手をかけた時、反對の側から瓦羅裡と開けた。

「オツト此處は通行止です」とぬツくりと立ちはだかつたのは先刻堅策が乗つて來た俵の、しかも邸の抱へ車夫で、群藏と呼ぶ男であつた。

「オー、お前は……」と、美佐子は驚きの目を見張つたが、引ッ返して、勝手へ通じる障子を開けると、そこには見なれぬ男が二三人、眼を光らせて立つてゐるので思はず立竦む。

「美佐子さん、その通りだ、逃げられるなら逃げて見なさい」と堅策は勝誇つたやうに身を反した。

美佐子はア、と絶望の叫びをあげて、光人を抱いたまゝ、その場へそのまま、泣崩れた。

時に、戸外へ自動車が止つて宿の老婆と囁き合ふ様子であつたが、ツカ〜と入つて来たのは、運轉手の木村であつた。

「夫人、お迎へにまゐりました」

「オー、木村！」と、美佐子は再び驚いた。

「サア、お供をいたしませう」と、木村は光人を抱き上げて、美佐子の手を取ると委細かまはず戸外へ連れ出して自動車へ昇載せた。美佐子は夢に夢見る心地！

自動車はやがて發動機の音高く砂塵を揚げて折からの宵闇を、いづくともなく走り去つた。併し、駒田をはじめとして、そこに居合す一同は、はじめより制めやうともせねば、敢て亦その跡を追はふともしなかつた。

〔五四〕

ウ井スキーやらカクテルやら混交に鯨飲つた光正伯は、殆ど椅子にも堪へないほどに酔ふた。

運轉手の木村から電話がかゝつて、自動車の故障が意外にひどく十分に修繕をするには數日間を要するといふ報告を甲斐澤から聞いたのも夢うつ、で自分がどうして此のカフェーベラミーへ來てゐるか！否、此處がベラミーであるか何處であるかも、ハツキリとは意識せぬほど、光正は酔ひに酔ふた。

「御前、どうも、ひどくお酔ひのやうでございますな」と、甲斐澤眞つ赤な顔をし

て、舌なめづりをしながら「モ、モウ一盃いかゞでございます」と尙も侑める。  
 「飲む、大いに飲むサ。ダガ木村は甚麼したか、まだ自動車は修繕らんのか」と光  
 正は、もう先刻の報告を忘れてゐる。それほゞ光正は酔うてゐるのだ。  
 「御前々々、お忘れ遊ばしちやア困るすな、自動車は修繕に四五日要ると申すこ  
 とでございますと、先刻申上げたではございませぬか、は、は、は、」と笑へば、  
 「ハ、ハ、ハ、然うか。スツカリ忘れてゐた、ハ、ハ、ハ、」と光正もテレかくしに笑ふ  
 「御前、まつたくお酔ひになつたですなア、ハ、ハ、ハ、」  
 「な、なアに酔ひはせん。す、すこし考へ事をして居つたのだ」と、光正は眼を据  
 るて、身體をフラフラさせてゐる。  
 「御前、デハ、お重ね遊ばせ」と、甲斐澤が云つた時、  
 「ヘン、御前々々ツと、饑饉歳の亡者が迷やアしめエし、それほゞごせんが戀しき  
 ア、一せんめし屋へでも行くが可い」と、近い卓子で誰かがいふと、忽ち多勢の  
 笑ひ聲がドツと起つた。

「何ツ」と、甲斐澤は勃如立ち上つて、聲のした方を睨めると、  
 「何が何んだツ」と之に應じて、同じく立上つた男がある。それは日外五峰山中で  
 正司に危害を加へた髯武者の悪漢であつた。

と「何んだ」と忽ち數ヶ所の卓子から立ち上つたのは、いづれも一見不人相  
 な、風體の怪しい男どもであつた。

「生意氣をいふなツ」と、叫んだ甲斐澤の聲が鋭くひゞくと、誰かマビールのグラ  
 スを地上に抛つて、それが破れる音と、もに、ワツと一同が總立ちになつた。

此時までも光正は、半ば眠つたやうになつてゐたが、此の騒ぎにハツと我に返つ  
 て、屹と見ると、數名の男が甲斐澤を取り圍んで云ひ争つてゐるので、急に立上ら  
 うとしたが、酔うて危い足許に、よろ／＼として卓子に支へる拍子に、洋盃が袖に  
 觸れて、地上に墜ちバチリと破れた。それを投げたと聞癖めたのか、それとも故意  
 と因縁をつやけうとか、

「オヤ、此野郎ツ」と、又二三人光正の方へ立ち向つた。